観光文化

Tourism & Culture

VOL. 200

2010 March

財団法人日本交通公社

特集◎ 旅讃歌
― 心のかて 旅で授かる生きる力

◆巻頭言

旅の余白　林 望……①

◆特集

- 旅の人生・八十年
  ―五十冊の紀行文の時代背景を語る　岡田 喜秋……②
- イギリスひとり旅
  ―積み上げてきた心の財産　清川 妙……⑦
- 「青春」行き、鉄道旅へのいざない　野村 正樹……⑪
- 日本の古代神話の世界を旅する　ケビン・ショート……⑮
- 旅育（たびいく）のすすめ
  ―旅で育む家族の絆、生きる力　村田 和子……⑲

◆二百号特別企画座談会（前編）

「旅は世につれ」……㉓

ゲスト：池内 紀氏・山口 由美氏／司会：外川 宇八

◎観光文化バックナンバー 一覧……㊲

近江・八幡堀

蔵屋敷と水路、江戸時代を彷彿（ほうふつ）させる近江八幡の街並みと八幡堀（はちまんぼり）は見事な光景を映し出していた。ちょうど桜がほころび始めた八幡堀を訪ねると私の写欲は掻き立てられた。ここは豊臣秀次が築いた八幡山城の城下町で、琵琶湖を往来する船をすべて八幡の町に寄港させたと伝えられる。その堀の役割には二つあり、一つは城を守るため、もう一つは町を発展させるため、との理由があった。近江八幡では、江戸時代以前の風情を残す碁盤目状の街並みが、二〇〇五年に重要伝統的建造物群保存地区に指定された。八幡山から眺める新町通りを中心にした重厚な街並みは、逆光も手伝い素晴らしい映像美をつくり出す。白壁の商家が立ち並び、手こぎ舟の行き交う光景が古き時代へと心を誘う。

近江商人たちが天秤棒（てんびんぼう）を担いで全国各地へ旅立っていった姿が思い浮かぶ。テレビや映画の時代劇の舞台として、なくてはならない存在となっている。ここにも古き時代の面影が色濃く残っていて旅人を魅了していた。

（写真・文　樋口健二）

旅の余白

作家　林　望

日々書斎に呻吟していると、無性に旅に出たくなる。こういう心を、昔、芭蕉は「風羅坊」と名付けた。

例えばこんなことがないだろうか。

朧々たる爛春の午下でも、底抜けに晴れた爽秋の朝でもよい、折しも来合わせた電車に乗り込もうとして、ふっと、このまま仕事も何もかも抛擲して、あてどもない旅に出てみたい、と思うような刹那が。

いやいや、実際には、浮世の柵は、そうそう行方知れずの旅に出ることなど許してはくれぬから、所詮見果てぬ夢なのだけれど、そういう時、私たちは、心の奥処に、この風羅坊という名の「旅への憧れ」をかそけくも宿していることを自覚するであろう。

私なども、仕事で全国を旅することが多いのだが、そこでいつも実践していることは、「旅の余白」を残しておくということである。

例えば、一泊二日の講演旅行だとしようか。この場合、まず第一日は「行くだけ」で、何も予定は入れない。宿は必ず自分で取って、仕事先の人とは何の約束もしない。そして、二日目の午後に講演があるとするなら、その日の午前中もまた「余白」として取っておくのである。

この「余白」が私のささやかな旅の時間で、ただ風羅坊の唆すままに、初めて訪ねる街の駅裏の繁華街を見物しながら、寂しい一膳飯屋に夕餉を喫してはもののあわれを味わったり、市場を逍遥しては見慣れない食べ物を買い食いしたり、観光客など一人もいないような古ぼけた街並みを歩いては、恐らく生涯に二度と見には来ないだろう風景を写真に撮ったり、あるいは俳句を詠んだり、ぶらりと骨董の店を冷やかしたり、その時その時の気分で、どんなふうにでも過ごせるように、心を自由に遊ばせる時間を用意しておくのである。

案内者もガイドブックも一切要らない。地元の人の案内も乞わない。ただ自分の心の赴くままに西東、風に転じゆく蓬のように歩き回る。そうやって、思いもかけなかった珍しいものと巡り合いたいのだ。

ああ、旅に来てほんとうによかったな、と思うのは、まさにこういう時である。

だから、ぜひ勧めたいことは、すべてを綿密なスケジュールで埋めてしまわないで、常にそういう「旅の余白」を残しておくということである。どの国のどの地方のどの町にも村にも、私たちの風羅坊の訪れを待っている珍しくも美しい「何か」が隠れているのだから。

（はやし　のぞむ）

旅讃歌
――心のかて 旅で授かる生きる力

活力に欠ける今日の日本にあって、今こそ「旅」に注目し、旅が生きる力となる〝旅の恵み〟に気づき、〝旅への誘い〟を発信すべく特集しました。人生に重ね合わせた旅の魅力を、さまざまな視点からご紹介します。

特集 1

旅の人生・八十年――五十冊の紀行文の時代背景を語る

紀行文学者　岡田　喜秋

「旅」との出会い

旅という言葉は、私にとって、「行動名詞」であると同時に、「人生名詞」でもある。旅をすることを生き甲斐（がい）として、幸い、健康を保ち、戦前から今日まで、旅を続けている。今年、満八十四歳になり、七度目の寅年を迎えたので、本誌編集長の要望に応えて、「人生は旅」という私の実感を語ることにする。私の場合、どこかへ行く、という行動だけでなく、旅への想いは、時とともにわく心の欲求と表裏一体だからである。

『奥の細道』の冒頭に書かれた

月日は百代の過客にして、行き交ふ年もまた旅人なり

という芭蕉の「旅人観」は、年ごとに実感を伴ってきた。過ぎていく歳月自体も旅人である。私の場合は、中学生時代が、最初の「開眼」であった。登山好きな先生がいたので、三年生の時、日本アルプスに登った。一週間にわたる縦走で、山の魅力を知った。この時、訪れた松本という町にほれ込み、住んでみたくなり、受験勉強に拍車がかかり、十六歳で旧制高校に入った。東京育ちだから、大自然にひかれたとも言えそうだが、大正末期生まれの私は、第二次大戦中が青春期だったので、山岳部で活躍できたのは二年足らずで、欲求不満を山から旅へ移し、木曽路を歩き、中仙道もほとんど歩いたので、芭蕉にひかれはじめ、心の向くまま、東北大学に入った。しかし、戦後を迎え、空襲で焼けた仙台の街から山並みを見て、「国破れて、山河あり」の心境を味わった。

奥羽山脈の山中を歩くうち、私は「こけし」という手作り郷土品の評価に、新しい発想を得た。今でこそ、「町づくり」が話題だが、こけしを作る老人たちの心を知ると、これは湯治場で売る土産物である前に、山中の「語られざる人生」だ、と思い、文章にしたくなった。

大学卒業期に、偶然、東京の本屋の店頭で『旅』という雑誌を目にした。戦後二年目の秋、紀行文の募集をしていた。この雑誌は、少年時代に親戚の家で見たことがあったので、もう復刊したか、と懐かしく思い、三千円という賞金にもひかれ、十五枚の原稿を書いた。選者は河上徹太郎と深田久弥であった。

応募した折に、発行所が日本交通公社（JTB）になっているのを知り、ここに就職できればいいな、と思い、入社試験を受けた。幸い、入社できたが、半年後、都心の支店で窓口業務をしていた時、紀行文が受賞した、との知らせを受けたのである。授賞式の時、「あなたは社員ですか」と言われて、苦笑した。私は経済学部を出ていたので、自分でも、「自己発見」と言うべき出来事であった。

一九四九年、紀行文の受賞者として、『旅』の編集部に配属されたので、以後、積極的に書くことになった。旅は、名実ともに、私の人生行路になった。「こけしを育てる山々」と題した一文が、紀行文の「原点」となった。旅の人生は、高校時代から始まり、大学時代も、そして、そのあと、具象物としての『旅』を二十二年間作った。編集長になったのは、一九五九年、三十三歳からである。そして、旅の人生は今も続いている。

旅のウオッチャー

私の生年は一九二六年、大正末期なので、記憶に残る過去八十年、その間、世に出した五十冊の著書をめくりながら、二十代からの旅心の変化を六期に分けて、語ってみたい。

一九五〇年代

処女出版は、二十七歳で出した『こころの山・こころの旅』である。戦中戦後の心境を語った。この時期、関心を持ったのは、第二次大戦が終わるまで立ち入り禁止だった要塞地帯。砲台や秘密基地のあった入り江はどんな風景かと、未知の世界にひかれて、探訪した。多くは海辺の秘境だったので、山中の秘境と合わせて、『山の奥・岬の果て』というタイトルで、一冊にまとめたのは、一九五八年。この年、編集者としては、松本清張に連載してもらった『点と線』が話題となり、公私ともに心に残る年である。翌年、私が編集長になった時、氏は積極的に、『時間の習俗』を連載してくれた。

一九五〇年代は、六〇年に近づいたころから、「所得倍増政策」が始まり、皇太子も結婚され、軽井沢が話題になったが、巷（ちまた）では「鍋底不況」という言葉が交わされ、気軽に旅はできなかった。東京タワーが建ち、庶民には、家庭に置かれ始めたテレビの方が魅力であった。

しかし、国鉄は、着々整備され、長距離列車を走らせ始めたので、私は全国的な視野から書いた『日本の秘境』を世に送った。一九六〇年ころまでは、ガイドブックも少なく、遠くに行きたくても行けない人も多かったのか、話題になり、「秘境ブーム」という言葉が生まれた。五年後、この本は文庫になった。

一九六〇年代

世は「安保闘争」に始まった一九六〇年

代だが、庶民の気持ちは、自主性を生み始め、旅する人も増えてきた。旅の競争誌も登場した。アメリカも、一九六一年から民主党のケネディ政権になり、外客誘致に力を入れる施策を立てた。十カ国から「トラベルライター」を一人ずつ招待して、アメリカを一周する視察旅行に、私も選ばれて、フロリダ滞在中、突然、「キューバ危機」が起こった。これは忘れ難い一九六二年の秋のことだ。

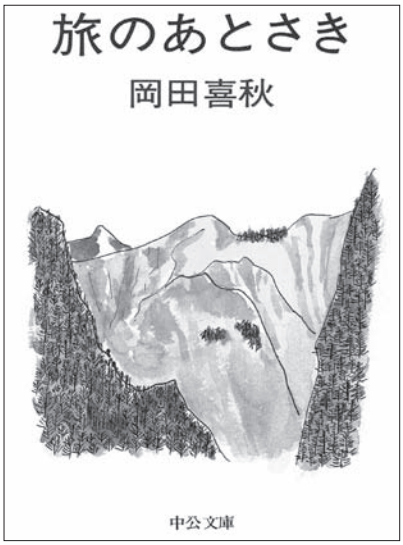
まだ日本人の海外旅行は許されていなかったので、この時の見聞を含めて、その後の外国旅行をまとめた『ニューヨークの靴音』と題したのは、「靴音」に実感を籠らせている。六〇年代は、四年目の一九六四年に海外旅行が自由化されたので、「観光元年」と言うべき画期的な年である。東京でオリンピックが開かれることになったので、春から東海道新幹線が開通した。新幹線は、京都という町を再認識させ、途中下車の旅先ではなく、目的地として再評価させた。「京都ブーム」が生まれ、一九六七年に企画した『旅』の京都特集号は、創刊以来、最高の売れ行きを示した。

表紙画は、著者の描いた七ヶ宿（宮城県）の民家

しかし、私はこの時期を「旅路の再認識時代」としてとらえ、『思索の旅路』というタイトルで、一冊書き下ろした。北山杉と原始林の違い、黒部ダムと天然湖の違いを語った。旅先は、自分で見つけるもの、そこで、何を感じ、何を考えるか、を示唆したかった。

クルマもそうだが、速く走る乗り物は、思索する余裕を与えない。六〇年代後半から、「旅」が「旅行」になり始めた。それは時代の進歩だが、「観光」は、旅心の変化に呼応しているか。人々は話題にし始めた。

六〇年代の経済的繁栄は、「万国博」という形で、一九七〇年に開花し、クルマの普及とともに、「高速陶酔旅行」が主流になり始めた。しかし、運転していては、思索はできない。『思索の旅路』が文庫本になり、売れたのは、七〇年代に入ってからだが、「旅」と「旅行」の違いを語った一章は、若い人々の関心を呼んだ。



オーストリア・ハルシュタットの山肌（著者画）

一九七〇年代

繁栄の後には、空虚感が漂う。「大阪万国博」で始まった一九七〇年代は、新幹線ブームも一段落した後の対策として、「ディスカバー・ジャパン」が、旅行者の誘引に一役を買った。日本の地方に潜むローカルカラーを発見させ、鉄道ファンは、蒸気機関車が

無くなると知って、SL撮影ブームが起こった。私は、地方色だけでなく、そこに住む人々に、愛着を感じていたので、『すべて・ふるさと』という書名で、知られざる風景と人情を語った。東京生まれの私にとっては、日本全国、どこも、羨ましい故郷に思えたからである。一九七七年は、「ふるさと志向」が話題になった。

五十歳を迎えた年に出した『旅に出る日』の表紙には、心象風景としての「ふるさとの駅」を描いて載せた。架空の駅だが、私が今いるのは、「人生」というホーム。隣の駅は、「過去」と「未来」。この絵は、気に入ったので、その後、私製の絵はがきに仕上げた。

旅は、自分の心の中に、その動機と期待が潜む。五十歳を過ぎた時、『旅の発見』と題して、旅の仕方を語った。「人間にとって、旅とは何か」を冒頭に、「見る、知る、遊ぶ」だけではない気持ちを持てば、旅とは「自己発見である」という見方を示唆した。

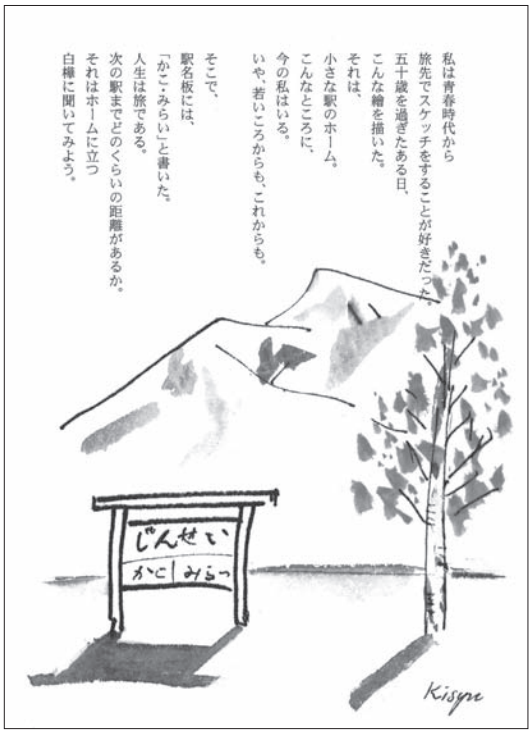
七〇年代の半ばに書き下ろした『旅について』は、自己発見した見解を集大成したものである。抽象概念としての「人生の旅」を含めて、一人旅に陶酔する若者の心理、修学旅行の功罪、行かずに楽しむテレビ番組の評価など、半ば社会批評を試みたので、この新書はロングセラーになった。

一九八〇年代

戦後生まれも中年に達したので、「熟年」という言葉が普及し始め、生活に余裕のできた夫婦への旅を勧める形で、「フルムーン旅行」という表現が生まれた。シニア世代の旅先としては、観光地よりも、健康保持という勧めが強まり、「森林浴」が話題になった。既刊の『山村を歩く』が文庫になり、続編を請われて、『山里にひかれて』と題した一冊をまとめた。

一九八〇年代は、国際航空券のダンピング時代で、外国旅行が普及したが、国内にも、時と所を選べば、こんな感動も味わえることを勧める意味で、地名入りで、『旅情を感じるとき』を世に送った。

しかし、一九八五年の夏、日航機墜落事故は、旅への期待と失望を、人々に改めて意識させた。この感想も含めて、『旅のあとさき』を語る一冊をまとめた。盛り上がっていた海外旅行がダウンし、国内なら安全という感じで、「東京ディズニーランド」が客を集めた。一九八七年には、国鉄もJRと改称し、国内旅行のサービスが顕在化した。昭和の末期、過去三十年間の足跡を、全国的な視野から『旅情百景』として紹介した。



私製はがき　人生の駅（この絵は文庫本の表紙になった）

一九九〇年代

二〇世紀末を意識したか、ソ連が崩壊し、東西ドイツが合併し、世界中の人々が、過去を再認識し始めた。私は五十代の後半から、観光学科を持つ大学で教えていたので、この期に相応しい旅の研究書を書いた。国益指向に傾いた観光政策だけでなく、人間は、過去において、どういう動機から、旅をしてきたか。これを知らずして、観光客誘致はできない、という見地から『歴史のなかの旅人たち』をまとめた。英語圏では、ジャーニーから、トラベル、そして、ツアーという普及の経過をたどってきたこと、観光時代以前の実態を教えたかった。

表紙画は木曽御岳山腹の温泉宿（濁河）

日本人の過去の旅も、『よみがえる旅心』として、紀貫之から幕末の吉田松陰までの三十六人の足跡を語った。日本は、「平成」という時代になったが、平静どころか、経済社会は「バブル崩壊」で、不安に満ちた世相になった。私は、観光の普及経過を検証しながら、『旅に学ぶ』という一冊をまとめた。二〇世紀末は、世界的に、戦後の観光普及を客観視すべき時代であった。「古希」を迎えた年に出した『旅する愉しみ』では七十年の人生を回顧した。

二〇〇〇年代

新しい世紀の到来に、何かを期待していた地球上の人々を、突然驚かせたニューヨークの摩天楼爆破事件。都市観光は出鼻をくじかれた感じで、行くなら、平穏な自然界だ、というムードが高まり、二一世紀は、「癒やしの時代」という言葉が使われ始めた。これには、不況という生活状況も後押しして、旅へのスタンスが変わってきた。人々は、心の状態を良くするための環境を求めて、都会観光よりも、自然に取り巻かれた滞在地を志向し始めた。私個人の自然に対する関心は二十代からあったので、二〇世紀末に出した『木を見て森を知る』という観察紀行を『自然に学ぶ』という形で、集大成した。

二一世紀を迎えて、私も七十五歳を超えたので、歴史に残る「古人の旅」に思いを致した。古人とは、西行、雪舟、芭蕉である。この三人は、人生の旅を、それぞれの芸道で貫いて生きた。和歌、絵画、俳諧という分野で、行動としての旅も語るに値する。私のたどってきた人生も、旅を貫いてきたので、「喜寿」を過ぎた時から、この三人の「旅の生涯」を書き下ろした。それぞれ三年かかったが、三冊に共通する「旅路」というタイトルには、訪れた所だけでなく、「人生行路」を含めている。

人生には、「ヨコとタテ」の旅がある。横とは、どこかへ行くことだが、縦とは、生きていくこと自体であり、芭蕉の言う「行き交ふ年もまた旅人」なのである。

旅という言葉には、英語では表現できない人生観と世界観が潜んでいる。私の旅は、死ぬまで続く人生と言い換えてもよい。

（おかだ　きしゅう）

特集２

イギリスひとり旅――積み上げてきた心の財産

作家　清川　妙

整理下手の私にしては珍しく、原稿用紙を横に四枚貼り合わせ、「妙イギリスの旅年表（英語上達への道）」と題した年表を作っている。

この三月二十日には、なんと八十九歳になる私は、今日改めて、その年表を繰り広げて見た。

それは、「年齢」「西暦」「行先」「できごと」の四つの欄から成っている。できごと欄には、旅で会った人との交流、身に沁む言葉（英語）、自分自身に与える箴言のようなものが記されていて、読めば過ぎ去った旅の日々の記憶が映像化されて蘇ってくる。

イギリスの旅年表というタイトルだが、正確に言えば、イギリス・フランス・アメリカ・カナダ・イタリア・ベルギーなど外国への旅すべてが含まれ、合計二十三回。その中で、イギリスへの旅十七回。イギリスひとり旅は十四回である。

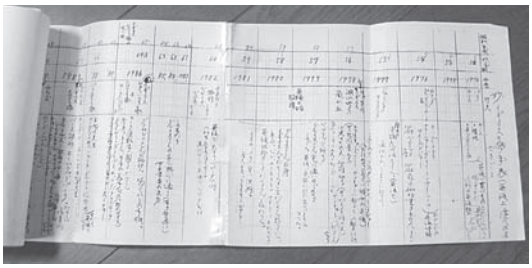
始まりは五十三歳、一九七四年だから、今日まで三十六年間。遅い年齢の出発だし、しかも執筆や講義を仕事とする多忙な私としては、我ながら、びっくりするほどの回数である。

英語上達への道とサブタイトルをつけているのは、実はこれらの旅すべてが、私の英語学習と密接な関わりを持っていたからである。

五十三歳の最初の旅は、ある婦人雑誌の特派で、フランスにサガンの『悲しみよこんにちは』の舞台を訪ねるものだったが、パリまでの往復は一人、現地ではその雑誌の特派駐在員に助けてもらった。彼のフランス語の流暢さ、国境を越えてイタリアに行けば、たちまち、見事にイタリア語を操る至芸に、私は魅せられ、悟った。

「心ゆく旅をするには、絶対に言葉が要るのだ」

と。ニースで、私は、英語が話せるというネクタイ屋のおじさんに少しはできると思っていたわが英語で話しかけてみたが、まったく噛み合わず、がっかり（今思えば相手の英語がひどかったとも思うが）。英語の勉強をやり直すと心に決めた。



イギリスの旅年表

帰国した私は、すぐに近所の英会話教室に入った。

だが、そこはグループレッスンで、なかなか成果は望めない。二年後、信州の宿にジュニア小説の原稿を書きに行っていた私は、そこで英会話に夢中の青年と会い、彼の勧めるベルリッツ英語学校に、帰宅後すぐに入学し、個人レッスンに切り替えた。

私の本格的英語修業が始まった。五十五歳から六十五歳までの十一年間、私は本業の執筆にも充実の日々を持っていたけれど、英語のレッスンにも、さながら熱心な女子学生のように通っていた。先生はイギリス紳士のグレイスさん。ベルリッツで四百レッスン以上取った後は、先生のご自宅に通うことにした。苦味の利いたジョークに鍛えられつつ、美しい正統イングリッシュにあこがれ、ひたすら通った。

その間に、カナダのプリンス・エドワード島、アメリカのアトランタ、イタリアのベローナ、イギリスの湖水地方、嵐が丘などに名作の舞台を訪ねる旅をした。雑誌社のスタッフとの同行の旅だったが、磨きつつあるわが英語を使うチャンスにもたくさん恵まれた。五十八歳の時、英検二級も取得した私はひそかに夢みていた。団体旅行でなく、たった一人でイギリスに旅し、英語の武者修行をしてみたい。なぜイギリスか。先生を通して、イギリス英語にもイギリス人気質にも慣れていたし、一度だけ旅したその国の人々の親切さにも触れていたからである。

＊　＊　＊

私は六十五歳になり、英語にかなり習熟していた。そして、夢を叶える機がやってきた。これもある婦人誌の依頼で、イギリスのマナーホテル二カ所に二泊ずつして取材することになったのだ。その四日間はガイドをつけてもらえる。私は編集長に頼んだ。「日本語のまったく分からないガイドをつけてください」――そのガイドを現地でのわが〝英語の先生〟にしようと思ったのだ。

ガイドのブラムレーさんは大当たりだった。オックスフォード出だ。知的でイギリス文学に造詣深く、英語はもちろん極上。申し分のない〝先生〟だった。

朝晩のあいさつ、サンキューやイクスキューズ・ミーを必ず、相手の名前を覚えること、メニューの読み方、いろいろなことの頼み方。旅の基礎マナーも教えてくださった。

この時泊まった二つのホテルのうちの一つ、ジャージー島のホテルの支配人ダフティーさんとの別れのあいさつが忘れられない。

「あなたはとてもすてきなゲスト。私たちはあなたを迎えることができて、とても幸せでした」

「私こそ、本当に幸せでした。このホテルを忘れません」

幸せの種は心に残り、その後、私はジャージーを八回も訪れることとなるのである。

ブラムレーさんと別れて、私は一人でロンドンからインター・シティー急行に乗って、ヨークとエディンバラを訪ねた。それは、予想をはるかに上回る愉しい旅となった。夫や先生がしきりに心配していた大きいスーツケースは、いつも誰かが運ぶのを協力してくれたし、列車の中では、食堂車に誘い、ティーをおごってくれたカップルもいた。

初めてのひとり旅の成功は、私に自信を与え、またまたひとり旅をと、ひたすら願うようになった。そこで、一年休んで次の年には、再びイギリスひとり旅を志した。自分で、旅のガイドブックから探し出したバースのホテルとブラムレーさん推薦のウェールズのホテル。一つの旅の中に、二つのホテル。それぞれにゆっくり泊まる。これがその後

ずっと私の旅の定番となった。同じホテルに何度も泊まるリピーターにもなった。こうして、私のひとり旅は、回を重ねるたびに味の細やかさと濃さを増していった。

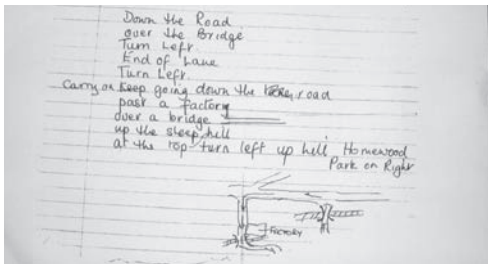
書き切れぬほどの人との出会いがある。忘れられない言葉がある。

ウェールズのホテルで親しくなった中年のご夫婦が、ディナーに私を誘った言葉。

「ご一緒にいかが？　私たちはあなたのお世話をしましょう」

この言葉はいろいろな場面に通用するし、生きていく上に、この精神は何より大切だ。まだ旅慣れていなかったそのころの私には、とりわけ身に沁みる言葉だった。

バースの高台にあるホテルから一人散歩に出て、道に迷い、とあるB&Bで道を訊くと、女主人は、ありあわせの紙にさらさらと案内を記し、地図まで描いて渡してくれた。



道案内地図

道を下って、橋を渡り、左に曲がり、小径の突き当たりを左に曲がり、そのまま道を下り続け……険しい丘を上ると、その頂にホームウッドパーク・ホテル。

韻を踏んで詩のような案内の言葉。その紙は今も旅ノートの中にある。

そのB&Bには何年か後に泊まり、家族並みのもてなしを受けた。

家族並みといえば、旅の中でおなじみとなった二人のタクシードライバーも思い出す。イギリス本土の担当はバースのマイク。ジャージー島はスコティッシュ・ジョンだ。

どちらの家にも招かれた。感心したのはファミリーの連帯の微笑ましさ。夫の客は妻の客、父の客は子供たちの客でもある。家族全員がテーブルを囲み、たとえ、マグカップのティーとビスケットというスモールメニューでも、笑顔と会話はたっぷり添え、ペットの猫まで仲間入りさせる愉しい雰囲気は特筆ものである。

猫をこよなく愛したマイクの家を、数年置いて訪ねた時には、愛猫二匹がもう世を去っていて、それぞれの肖像画が額に入っていた。

旅で知り合った人たちにも、さまざまの幸不幸のストーリーがあり、みんな、ひたすらに生きている。ジャージーのダフティーさんも、最初のホテルから別のホテルに移り、次には、晴れた日にはフランスが見える高台の、エレガントなレストランのオーナーとなった。彼の紹介のホテルにも何回か泊まり、ジャージーは、イギリスの中のふるさとのようになった。

ふるさとはもう一カ所ある。コッツウォルズである。

ひとり旅を続けていた最中の一九九四年から九五年にかけて、私は夫と息子を続けざまに病気で亡くし、自分自身も胃がんの手術をした。

「嵐の時代でした」と言うと、わが教室の人は「いいえ、竜巻の時代でしたよ」と答えた。

落ち込んでいる自分を立て直そうと、私はひとり旅を再開した。一九九六年、以前その傍らを通り、心惹かれていたバイブリーのスワンホテルに泊まった。その時、そこでアルバイトをしていたキャスリンという若い女性と親しくなった。その後は、彼女の協

力で、コッツウォルズの各地を旅した。彼女の結婚式にも列席し、その家のあるボートン・オン・ザ・ウオーターには郷愁のような思いを抱いている。

キャスリンと親しいショーンとシルビアという夫婦がその地でB&Bを経営していて、そこにも二度ばかり泊まった。手芸の上手なシルビアが「デザイナーズバッグよ」と言って、お土産にくれたパッチワークのバッグを見ても、また、行きたくなる。

だが、私のイギリスひとり旅は二〇〇七年で止まっている。年を重ねてきた今も、変わらず連載の執筆や講義を続けていて、あまりにも忙しいからだ。

それに、このごろ、足が少し重だるくなった私は「また行けるかなあ」と、やや不安にも思っている。

キャスリン、シルビアと

でも、私は気を取り直す。いつも肩の辺りにいるもう一人の私が言う（私は、それを幻の秘書と呼んで、人を笑わせているのだが）。

「何を言っているの。足がチラと重だるいだけじゃないの。頭も体も健やかそのものじゃない。もう一度ぜひイギリスに行っていらっしゃい」

私は、ジャージーのダフティーさんの所に行く自分を、イメージに描いた。

「また会いにきましたよ。もう来られないかなあと思っていたけど、どうにか、まだひとり旅をこなせましたよ」

旅ノート

「ミセス・キヨカワ、それが人生というものですよ」

ダフティーさんは、微笑しながら握手の手を差し伸べてくれるだろう。

私は、もう一度、イギリスひとり旅をして、今度は、のんびりとホリデーを愉しみたいと思っている。数年前から、若きイギリス人女性ジェニーについて、月一回だが、個人レッスンも取り続けているので、英語のさびもだいぶ落ちているはずである。

私は、いつしか十数冊もたまった旅ノートの一冊を開いてみた。こんな言葉が書いてある。

〝アクティブ、アクティブにと、絶えず心のネジを巻き、旅をしている。ひとり旅はネジ巻きの旅、ネジ巻き連続の旅である〟

〝人が自分に話しかけてくれないと、さびしがったりせず、それよりも、自然に人が自分に話しかけたくなるような雰囲気を持とう〟

十四回のイギリスひとり旅は、私を、詩人にも、時には哲学者にもしてくれた。

心の財産を少しずつ積み上げてきた旅だと思う。

（きよかわ　たえ）

特集３

「青春」行き、鉄道旅へのいざない

作家　野村　正樹

「鉄道の旅」の人気の秘密とは？

「鉄道の旅」のブームが訪れて久しい。

当初は、乗り鉄（列車や路線の乗り歩き）、撮り鉄（写真の撮影）、録り鉄（走行音や案内放送の録音）、収集鉄（切符やグッズ類の買い集め）、スジ鉄（ダイヤグラムの研究）から、果ては葬式鉄（廃線跡を訪ねて往時をしのぶ）……などの鉄道マニアから火がついたが、今ではごく一般の旅行好きにもファン層が広がってきた。

例えば、定年を過ぎて時間はたっぷりとある熟年層に、夫婦の「のんびり旅行」や「青春18きっぷ」を使っての冒険旅行などが人気だ。会社勤めなどをしていた時代には忙しくて行けなかったあこがれの場所への旅を、晴れて楽しむ人も多い。旅と鉄道を愛する一人として喜ばしい限りである。

この種の旅好き（特に熟年層）に鉄道が好まれる理由は、そこにマニアやファンの域を超えた広範な魅力が潜んでいるからだと思ってやまない。筆者なりに考えてみると、謎を解くキーワードは「人生の喜怒哀楽（特に喜びと楽しみ）」。つまり、鉄道の旅には、人生や日々の暮らしの喜びや楽しみにつながる五つの魅力がありそうだ。

人生の幸福につながる五つの魅力

それらを考えるヒントとして、こんな例を挙げてみよう。

実は、著作の世界にも〝鉄道で旅すること〟と〝人間が生きること〟を見事に連接させたジャンルがある。よく「鉄道文芸」とも呼ばれ、特に二人の大御所が有名だ。

一人は『阿房列車（第一～第三）』（新潮文庫）の内田百閒氏、もう一人が先年亡くなられた宮脇俊三氏。確かにお二人の代表作には、人間の幸福につながる五つの魅力が散りばめられていた。おのおのの項目について、それぞれ三つのキーワードを配してみると次のようになるだろうか。

1．遊び・楽しみ・癒やし

『阿房列車』の根幹にあるのが、内田先生の「遊び心」である。

本来ならば「何かの目的のために、どこかに行く」のが旅だが、先生は「用事がなければ、どこへも行ってはいけないというわけはない」と考え、「何も用事がないけれど、汽車に乗って大阪に行ってこようと思う」と出かけてしまう。それも豪華な一等車を奮発し、ヒマラヤ山系君という相棒まで誘って道中を楽しんだり、旅先の宿で羽を伸ばしたり。今でも多くの旅行好きがあこがれ

る、ちょっとぜいたくで、思い切りゆったり、のんびりの、天真らんまんにして自由気ままな旅のモデルケースとも言えそうだ。

2. 冒険・挑戦・達成

さらに「鉄道の旅（主に乗り鉄）」を「人生の冒険・挑戦・達成感」にまで昇華させた先達が宮脇俊三氏だろう。

五十代半ばで会社員生活を卒業した氏は、あり余る時間を使って、ずっと我慢してきた大好きな鉄道の乗り歩きを計画する。しかしやがて、せっかく乗るならばチャレンジを！と考え、日本中の鉄路を同じルートを通らない〝一筆書き〟で回る冒険旅行を実施。その記録をまとめたのが、今も多くの鉄道ファンのバイブルとなっている『最長片道切符の旅』（新潮社）である。

まさに、鉄路を冒険・挑戦の道具とし、その達成感に喜ぶ、まるで求道者の旅。しかもそれだけにとどまらず、道中で人生についての思索にもふける奥深さも持ち合わせている。

ちなみに、沢木耕太郎氏の『深夜特急』なども、この系譜に属する名作だろうか。

3. 出会い・ふれあい・自分史

その宮脇氏の開拓したもう一つのジャンルが、旅を通じての出会いや発見、駅や車中などでの鉄道員や乗客とのふれあいをつづったり、思い出の列車や場所を訪ねながら自分の半生を回顧する、より文芸的色彩の濃い作品群である。

何といっても代表は、終戦の日に山形県の「今泉」という小さな駅で聞いた玉音放送の記憶をたどる「米坂線109列車」が収められた『時刻表昭和史』（角川書店）や、会社員の定年を終着駅になぞらえたエッセイ集『終着駅は始発駅』（グラフ社）など。いずれも、鉄道の旅の魅力をより広める契機となった名作たちである。

4. 生きる喜び・勇気・希望

さて、実は筆者も幼少時代からの鉄道好きであり、会社員を経て推理小説やビジネス書の作家となり、還暦を過ぎてから大好きな鉄道も書き始めた人間である。

そんな筆者のスタンスをひと言で示せば、先の3と4を〝連結〟したパターンかもしれない。例えば、数年前に上梓した『のんびり山陰本線で行こう！』（東洋経済新報社）という作品は、会社員人生を京都～下関間の鉄路になぞらえた一冊。スピードは速いが車窓風景が退屈な「山陽新幹線」と、日陰の裏街道をのんびりと走るが、道中を思う存分に楽しめる「山陰本線」の旅のどちらが楽しいかを、一週間にわたる乗車体験を通じて考える本だった。

さらに、鉄道文芸のデビュー作となった『嫌なことがあったら鉄道に乗ろう』（日本経済新聞出版社・第三十回交通図書賞）では、鉄道の旅が〝生きる元気と勇気と希望のエネルギー〟になることを説いてみた。

5. 人生の記録・記憶・記念の引き出し

そんな〝鉄道＝人生派〟の筆者が、次に

『のんびり山陰本線で行こう！』
東洋経済新報社

『嫌なことがあったら鉄道に乗ろう』
日経ビジネス人文庫

たどり着いた新境地もある。語呂合わせをすれば、記録・記憶・記念という〝三つの記〟を主役として、「思い出の鉄路」を通じて自分自身の「半生を回顧しよう」という試みだろうか。本稿を書く少し前に上梓した『東京 思い出 電車旅』（東洋経済新報社）などは、まさにその一冊だ。

発端は、とある五月の大型連休に始まる。六十代半ばを迎えてヒマに明け暮れていた作家（つまり筆者）が思い立って書斎の大掃除をしている時に、ふと五十年前（つまり高校生のころ）の古い写真とネガを見つける。そこで最も多かったのは、昭和三十年代の東京を走っていた電車だった。

渋谷の玉電、まだ地上にあった新宿駅を発車する小田急・京王電車、銀座通りや赤坂見附交差点を走る都電、古い地下鉄の車両……。半世紀ほど前、神戸の高校生だった筆者が何度も上京を重ねて東京の街歩きをした時に写したものだ。そこからふと、こんなアイデアが浮かんだ。

「これらの古い写真を手掛かりに、もう一度、あの場所を歩いてみよう」

まさにヒマに任せての、ムダで、物好きな街歩きの始まりだったかもしれない。

『東京 思い出 電車旅』
東洋経済新報社

「青春 思い出 鉄道旅」の三大魅力

ところが実際にやってみると、これが思った以上に楽しいことも知ったのである。

昭和 35 年の上野駅（中央は高校生の筆者）

第一は、意外な発見があることだ。

写真のなかには「ここはどこ?」や「なぜ、こんな場所に行ったのだろうか?」と思うものも少なくない。時には「撮影場所探しの探偵気分」を楽しんだり、「あのころの私はあんなことを考え、あんなことに興味を示していたのだ」と自分再発見をすることもある。

第二は、たっぷりと時間がつぶせるにもかかわらず、それほど費用はかからないことだ。

往時の写真を持って街を訪ねれば軽く半日は過ごせるが、出費は電車賃と昼食代程度。それで青春プレイバックを楽しめ、ノスタルジックな気分にも浸れれば最高の遊びであり、癒やしではないか。

そして第三は、家族にも優しいことだ。

定年を迎えた亭主に対する妻の一般的な不満の代表が、「いつもゴロゴロと家にいて（家庭内粗大ごみとも言われる）、三食全部を作らなければならない」こと。その精神的ストレスと負担が軽減される。

そう考えてみると、青春の思い出をたどる鉄道旅は熟年世代にとって、最も手軽で、最も家族に感謝され、最も心にしみ入る〝究極の大人旅〟ではないだろうか。

名作童話ではないが〝幸福の青い鳥〟は、ごく身近で手近な場所に隠れていたのである。

しかも、どう頑張っても二十代や三十代の若いころにはできなかった旅である。「年を取る」ということは「人生の年輪を重ねる」こと。こんな旅が楽しめるのも、まさに〝人生の年輪〟のたまものに違いない。

ちなみに、そんな筆者が東京の次に出かけた旅先は生まれ故郷の「神戸」であった。

この街で自宅からいつも乗っていたのが、阪急電車という私鉄。本誌が出るころには、その阪急に揺られて再訪した、大阪梅田や、京都四条辺り、箕面（みのお）、宝塚、三宮、六甲などを巡る旅の記録を執筆しているはずだ。

人生プレイバックへのいざない

こうして考えてみると、確かに日本人にとって「旅」と「鉄道」は格別の意味を持っていそうだ。

古代の熊野詣でや、長い歴史を誇る四国のお遍路さんがある。さらに江戸時代には庶民にもお伊勢参りや富士登山などの旅が認められていたように、旅好きは日本人のDNAとさえ思える。

そして明治時代からずっと日本の津々浦々を走ってきた鉄道は、今や私たちの日常生活や人生の一部ともなっている。誰にも、その鉄道で通った学校や、鉄道に揺られて働きに出かけた場所や、鉄道に乗って転勤をしたり、家族や友人と鉄道で訪ねた旅先での記憶がぎっしりと詰まっているだろう。「青春 思い出 鉄道旅」の醍醐味とは、そんな旅と、鉄道と、人生をつなぐ〝三重連〟の魅力だと思ってやまない。

大きく分けて、そこには以下の三つの楽しみが潜んでいる。

① 自分の半生を思い出す楽しみ

宝塚大劇場と阪急電車を写す筆者（野村優 撮影）

② 整理した資料を掘り起こす楽しみ

③ もう一度行きたい場所を選ぶ楽しみ

さらに、もう二つの楽しみもありそうだ

④ 旅のパートナーと過ごす時間の楽しみ

⑤ 人生プレイバックで若返れる！

実は、先の『東京 思い出 電車旅』の取材を行った最後のほうでは、妻も現地に同行してくれた。最大の動機は夫婦の好きな街歩きの一環として。同時に、三十数年を連れ添ってきた亭主がどんな青春時代を送ったかを垣間見たいとの思いもあっただろう。

神戸での阪急電車の旅には息子を（ダメモトで）誘ったところ、意外にも「行ってもいいよ」とのひと言が返ってきた。三十（みそ）路（じ）を過ぎた彼も、「父親のルーツや幼少時代を過ごした場所」への興味を持っていたのかもしれない……。

もちろん、旅の名パートナーは家族以外にもいる。時には学校時代の友人や、かつてそこに一緒に旅をした仲間を誘ってみよう。往時とはひと味もふた味も違った、それは中身の濃い旅が生まれるに違いない。やはり旅は長い人生の道中に欠かせない〝命の洗濯〟のようだ。

（のむら　まさき）

特集４

日本の古代神話の世界を旅する

東京情報大学環境情報学科 教授
ケビン・ショート

日本の神話との出会い

ぼくが日本の神話と初めて出会ったのは、およそ四十年前だった。当時は日本に来たばかり。日本語を全くゼロから学ぼうとしていた。会話と読み書きの勉強を同時に始めたが、当時の外国人向け日本語の教科書だけではなく、もっと生き生きしたものも読んでみたいと思った。でもまだ初級の段階で、漢字もわずかしか知らないし、新聞や小説はとても無理だった。その時目についたのは、どこの本屋でも手頃な値段で売っているおとぎ話の絵本。これらの絵本は大きくて色鮮やかで雰囲気が楽しい。おまけに話が短くて全部ひらがなで書かれているから、初心者のぼくにとってとてもうれしかった。『いっすんぼうし』、『ぶんぶくちゃがま』、『つるのおんがえし』などなど、日本の代表的な昔話を次から次へと買い求めて、日本人の友達に笑われながらわくわくと読んでいた。地下鉄や喫茶店で読むと特にびっくりした目で見られたが、この絵本を通して、ぼくは日本語だけではなく、日本の文化そのものも学んでいるような気がした。

そのころ読んだ絵本の中に、『いなばのしろうさぎ』や『やまたのおろちのたいじ』も含まれていた。当時のぼくはこれらの話も『さるかにがっせん』などと同じように、一種のフェアリーテールだと思い込んでいた。実は日本の古典神話のエピソードをフェアリーテール風にアレンジしたものだが、それを分かったのはだいぶ後だった。

ぼくは子供のころからギリシヤ神話や旧約聖書の話、ケルト文化の名作である『アーサー王』などのストーリーが大好きだった。そして、日本語や日本の歴史文化を少し学んで、日本にも同じような古典神話があると知り、大変喜んでいた。ところが、日本人の友達と神話の話をしようとすると、皆が、ちょっと落ち着きをなくして話の内容を変えようとした。「なぜ日本人は自分の国の神話にあまり興味がない?」と、とても不思議に思っていた。

やがてその態度の歴史的な背景が十分に分かってきた。つまり、明治から昭和初期にかけて、日本の権力者は国家主義や軍国主義、人種差別などの思想を国民に押

因幡の白いウサギの伝承地域

しつけるために神話を乱用したのだった。軍事的な侵略を望んだ権力者は、日本の神話を不当に解釈して、神の純粋な子孫である日本人は優秀な人種であり他人種（特にアジアの他人種）を支配する権利を持つ、という観念を国民に押しつけてきた。終戦後、この神話の乱用に対して反論が起こり、多くの国民が神話そのものに強い不信感を抱いたと理解されてきた。

もちろん、この歴史的な背景は否定できない。でも悪かったのは神話そのものではなく、それを勝手に解釈して自分の目的に乱用した権力者だった。そして、戦前の日本に限らず、同じような問題が歴史を通して各地で起こってきた。例えば、ヨーロッパ諸国が旧約聖書の「創世記」などの話を植民地制度や奴隷制度、自然破壊や資源の略奪などの正当化に使ってきた。また、ナチスドイツもゲルマンや北欧の神話を人種的至上主義や超国家主義の裏づけに利用した。今でも中東地方の戦乱の裏には、それぞれのサイドが自分の主張や土地の所有権利の根拠を聖書の話に求めている現実がある。

日本には神話を乱用する過去はあったものの、今は平和の国であり、異文化や異人種に対しての知識や理解がとても高い。自分の国の神話を恐れたり恥に思ったりする必要が全くない。逆に、その神話の素晴らしいストーリー性をフレッシュな目で見直して、最高の文化遺産として楽しんだり誇りを持ったりできる良い時期がきたと思っている。

日本の神話の魅力

日本の神話は知れば知るほど面白くなる。ストーリーの偉大さとドラマ的な魅力においては、旧約聖書やギリシヤ神話に全く負けない。日本という国を作り上げていく話の中に、恋愛と裏切り、浮気、焼きもち、兄弟間の張り合い、友情、欲望、憎しみ、怒り、悲しみなどなど、すべての感情と熱情が豊富に出てくる。

「でもその話は本当にあったとケビンは思うの？」とよく聞かれる。これに対してぼくは、「話が実際にあったかどうかは関係ない」と答える。神話というものは歴史の事実をありのまま記録するわけではない。しかし一方、全くの空想でもない。話の中に、ある土地とその土地に住む人たちのストーリーが語られている。そして、話の全体を文学として楽しみながら、当時の人たちの考え方と価値観、宇宙観なども見えてくる。

例えば、「国生み」というサイクルがあるが、これはイザナギとイザナミが混沌としたカオスから日本の国土そのものを生み出す話。国生みはとても大事な仕事であるが、これに素朴な無邪気な気持ちで取り組む。まるで二人のティーンエージャーが初デートで初キス！ お互いの体と性に対して抱く好奇心と興奮、または不安と畏敬（いけい）の念、人間誰でも一回ぐらいは体験する複雑な「初体験」の気持ちが強く伝わってくる。その後、男女二柱（ふたはしら）の神の間に深い愛が芽生えてくる。しかし、イザナミが火の神を産んで焼け死ぬと、今まであんなにのんきだったイザナギが、愛（いと）しき妻を突然失うことのあまりの悲しみに完全にブチ切れて、恐ろしい猟奇殺人鬼に化

イザナギとイザナミの国生みの伝承地のひとつ
淡路島のおのころ島神社

けてしまう。多分、人間誰しも同じような恐ろしい面が深層心理に隠れている。神話というものは、ある特定の土地と人々の話でありながら、全人類共通の話でもある。

ところが、この残酷な血まみれのエピソードからも、新しい創世が始まる。火の神の体から飛び散る血から、いろいろな神が生まれてくる。その中には山の山頂や中腹、ふもとや深い谷間など、いろいろな自然環境に宿る神が含まれている。同じような「神生み」という現象が他のエピソードにも見られるが、日本の神話の中で特に注目するべきものだとぼくは考えている。つまり、イザナギとイザナミが物理的な土地を生むだけではなく、海に宿る神、川に宿る神、木の神、草の神などなど、その土地の至るところに生息する生き物に宿る神も生む。このような神生みによって、イザナギとイザナミがあらゆる自然と生き物に神の聖なるエッセンスを吹き込むことになる。この神生みから発生する「万に聖なる命が宿る」という価値観と宇宙観が、日本の伝統的な暮らしや精神文化に広く深く充満していて、特にさまざまな環境問題に悩まされている現在の社会にも、人間と自然の好ましい関係についての強いメッセージを語っていると思う。

イザナギとイザナミ（沼島、兵庫県）

また、アマテラスが食物の女神であるウケモチの死体から生じた穀物を高天原（たかまがはら）の畑と田に植えて育つエピソードや、オオクニヌシがあちこちの地域で矛を地面に突き刺して土地を豊かにするエピソードなどに、今注目を集めている日本の里山景観のスピリチュアルのルーツを探ることができると思う。

観光の資源としての神話

神話は、読んだり比較したりして理論の段階で楽しむ方法もあるが、その神話の魅力をフルに体験したいなら、それぞれのエピソードが伝わる現地を実際に訪ねるほかはないと思う。現地に立つと、想像力が刺激され、そのストーリーが生き生きとしてくる。日本の神話の場合、多くのエピソードが特定の地域に長く伝承され、地元の暮らしと文化に深く滲（にじ）んでいる。

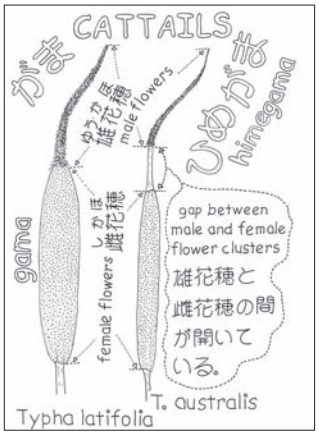
ぼくは、「因幡（いなば）の白兎（しろうさぎ）」という話に四十年前、絵本として初めて出会った時からずっとひかれていて、その伝承地である鳥取県の海岸を訪ねることにした。その海岸に立つと、目の前にウサギが流された沖の島が浮かび、後ろにはオオクニヌシとウサギの出会った場所に「白兎（はくと）神社」が建っている。神社の周りには、タブ、ヤブニッケイ、カクレミノなどの常緑樹が生え茂る日本海沿岸の原生林が残り、神社の前に「不増不減池」があって、ヒメガマという水生植物が群落を作っている。このエピソードの主人公であるオオクニヌシがこのガマの花粉を使ってウサギの皮膚を治療したが、ガマの花粉は今でも「蒲黄（ホオウ）」と呼んで、軽い火傷などの皮膚病を治療する漢方薬として使われている。これは日本

オオクヌヌシと白兎（因幡海岸、鳥取県）

で実際に薬草の使用についての最も古い記録でもあり、民族植物学的にも貴重な話である。

日本の神話の伝承地は近畿、山陰と九州地方に集中するが、中部から関東にかけても、ヤマトタケルをめぐる話が多く伝えられている。オトタチバナヒメが自ら走水（浦賀水道）の海に身を投げて海神の怒りを鎮めたエピソードに関連する伝承地が多いが、秩父の山ではオオクニヌシが武器などの宝物を隠したロマンあふれる伝説も面白い。

日本の各地にも神話とのつながりのある場所が多い。例えば、信州に戸隠山という山がある。高さは一、九〇〇メートルほどしかないが、尾根はゴジラの背中のようなゴツゴツした切り立った岩場からできていて、特に山頂近くにある「蟻の戸渡り」という細い細いナイフリッジが恐ろしい！しかしこの雄大な山全体はアマテラスが籠った天岩屋戸だという伝承がある。伝説によると、アメノウズメの官能的な踊りに誘われ、アマテラスが天岩屋から身を少し乗り出すと、戸口のそばに隠れていた力持ちのアマノテジカラが戸を素早く持ち上げてものすごい勢いで投げた。その戸が九州から信州まで飛んできて、戸隠山になったということ。この伝説を学びながら山を登ると面白みが倍増するが、同じような神話に関連する地域伝説が日本の各地で楽しめる。もちろん、各地の神社に祭られている神々にも皆、それぞれの面白い神話ストーリーがあり、このストーリーを探ろうとすると、ただの神社参りが歴史文化を学ぶ楽しいエコツアー経験にもなる。



ガマとヒメガマの比較

天岩屋戸の伝説とつながりのある信州の戸隠山

ぼくは、今までは日本の神話の伝承地をチャンスができる限り訪ねてきたが、実は大きな夢も大事に抱いている。これは、時間をじっくりとかけて、国生みの淡路島からスタート、黄泉の国を探ってから出雲や九州の伝承地で神話の流れを追って、最後は三輪山や伊勢神宮にたどり着く。神話は日本という国の成り立ちのストーリーでもあるから、旅の途中で弥生時代と古墳時代の考古学の遺跡や資料館にも立ち寄りたい。こうすれば、日本の国や自然、または日本人のスピリチュアル的なルーツに近寄ることができると思う。

日本の神話と、その伝承地の自然と文化をワンセットとしてとらえると、国際的にもアピールできるエコツーリズムや歴史文化ツーリズムの魅力は十分あると思う（sacred tourism、つまり来客が自分のスピリチュアル面を磨き上げる目的で訪ねるという魅力もあるが、これは別な課題である）。

（ケビン・ショート）

特集５

旅育（たびいく）のすすめ――旅で育む家族の絆、生きる力

旅行ジャーナリスト
村田　和子

現在八歳になる息子と初めて旅をしたのは、彼が生後四カ月の時。まだ首が据わったばかりの子供を連れて旅に出るという話に、受話器の向こうであきれる母の声を今でも思い出す。〝子連れ旅行〟という言葉もスタイルも確立されておらず、「小さな子供を連れて旅に行くなんて（子供がかわいそう）」、そんな見方が大半な時代。初めてのわが子との旅は、旅の意義を考え、子供との旅の原動力を得る貴重な機会となった。家族で旅をした先は、間もなく四十七都道府県を征し、訪れた国も八カ国になる。それぞれの旅は、息子の成長の記録とともに大切な思い出として深く記憶に刻まれている。

子供との旅を通じて感じるのは、旅先では心のゆとりができ、しっかり子供と向き合い絆（きずな）を深められること、そして、旅は子供の生きる力を養い、心身を成長させる場として大変にいい環境であるという二つだ。わが家の場合、子供の成長に「旅」が果たした役割は非常に大きく、旅に育ててもらったと言ってもいいほどだ。五感で触れ、さまざまな人と出会い、体験から学んだことは、着実に生きる力につながっていると確信する。今までの旅を振り返りながら、家族旅行の意義、そして魅力を紹介したいと思う。

初めての家族旅行での決意

子供が生まれると、それまで仕事を持ち社会とのつながりを当たり前のように考えていた私の生活は一変した。まだ言葉を話せない子供と向き合い、命を預かるという責任の重大さ、そして正解がなく思い通りにならない育児に、わが子を愛（いと）しく思う気持ちと同時に、ストレスを感じることが多くなっていたのだ。心のシグナルを感じ、息子の首が据わるのを待って旅の計画を始めた。ところがいざ一緒に旅をしようとすると、これがなかなか大変なことだと気がついた。昨今ではさまざまなサービスが提供され、小さな子供との旅にも出かけやすくなったが、当時は十分なサービスも情報もなく、すべてが手探りだった。できるだけ子供に負担がかからないように移動時間や休憩場所の候補を調べ、子供の物は、必要と思われるものはすべて持っていくことにした。あまりの荷物の多さに移動は車以外考えられないほど。

フランス・パリへ～　息子７才の夏

小さな子供連れに理解があり、温泉とおいしい食事のある宿……という条件でやっと探し出し向かったのは、自宅から車で二時間ほどの千葉県にある宿だった。

チェックインを済ませ部屋に入り、窓に視線を移すと、一面に青々と広がる太平洋が目に飛び込んできた。開放感のある素晴らしい光景に心が癒やされる感覚は、今でもしっかりと覚えている。昼寝をしている息子を夫に任せ、ひとり温泉でゆっくりとくつろぎ、久しぶりに自宅の外で地元の味覚が満載の夕食を頂く。一泊二日の短い滞在だが感動の連続で、こんなにも旅に救われた思いがしたのは初めてだった。すっかり心は落ち着きを取り戻し、お陰で今日まで穏やかな気持ちで子育てをしている。一方、普段仕事で忙しい夫も、子供と一緒に昼寝をしたりベビーカーを押して散歩に出たり、私とは違う非日常を満喫したようだ。

子供にとっては迷惑な話かもしれない。しかし現実問題として、親が心身共に元気でいてこそ、わが子にきちんと向き合うことができる。「母親が上手にストレスを旅で癒やし、育児に前向きに取り組むのは、子供にとっても社会にとっても意義のあること」。そんな思いから自ら子連れの旅を積極的に実践し、旅に出たいがなかなか踏み切れない親へのエールを込めて情報発信を始めた。

親子それぞれで過ごす時間の効能とは

子供が歩き始め、そして表情が豊かになると旅の選択肢も広がり、計画も子供中心に変わった。旅先では、日常では見たことのないものに触れる機会も多く、意外な子供の興味を発見したり、成長を感じるうれしい出来事も多くあった。家族旅行といえば、皆で一緒に過ごすのが醍醐味（だいごみ）だが、わが家では「親子別々に過ごす時間」も大切にしている。

世界の子供達と異文化交流（フィジー）

まだ国内では少ないが、二～三歳から子供専用のアクティビティーを提供する宿や施設も徐々に増えている。そういったものを積極的に利用し、子供の視点で旅先を楽しむ時間を作り、その間大人は、ダイビングや美術館の見学、リラクセーションや読書など、子供と一緒ではなかなかできないことをして、自分のために時間を費やす。「せっかくの家族旅行で別々に過ごすなんて……」と感じるかもしれないが、おのおのに価値のある時間を過ごした後に出会うと、親子はどんな会話をするか想像してみてほしい。

子供は「こんなことしたよ、できたよ」と親と離れていた間の自身の経験を一生懸命に伝えようとする。感動を共有したいという意思と伝えるために努力をすることでコミュニケーションスキルが身に着く。両親も自らの体験を子供に話せば、その旅は一度で二倍、三倍の思い出ができることになる。もちろんプログラムに参加中は、親と離れ初めて会う同世代の子供たちと過ごすのだから、自立心や協調性も自然と磨かれる。

海外ではキッズアクティビティーという、現地の文化や遊びを体験できるプログラムを提供する施設も多い。通常、英語での運営がメインとなるため、日本人は敬遠して利用しない人も多いという。就学前から英

語を習わせる家庭も多いというのに、なんともったいない話だ。フィジーでは、ほとんどの生徒がオーストラリア、ニュージーランドの子供たち。最初は気にかかり遠目で見ていたが、大人が考えるほど言葉の問題は重要ではないようですぐに仲よく遊び始めた。しかもオセアニアには親日家も多く日本語を習っている子供もいて、息子を相手に片言の日本語でやり取りをする場面もあり驚いた。何もなければ素通りしてしまう人々とも、ちょっとしたきっかけで交流は生まれる。昨今国内では、着地型のプログラムが数多く企画されているが、成長や自立を促す子供が一人で参加できるプログラムの実施や増設を、切にお願いしたい。

本物に触れる経験の大切さ

ダイナミックな自然、歴史ある建造物、有名な絵画など、旅先では多くの五感を刺激する「本物」に出会う楽しみがある。本物との出会いは、子供の感受性を豊かにし、発見が多い。息子が二歳の時に沖縄へ出かけた際のこと。海で遊ぶのを心待ちにしていたため、到着後すぐに浜辺へ向かった。しかし海を見た瞬間に笑顔が消え「怖い」と言って近づかない。テレビや写真で海は見たことはあるし、波があることも知っていたはずだ。しかし実物を前にすると、いずこからともなく打ち寄せる波は迫力満点で飲み込まれそうだし、波の音や大きさも息子の想像を超えていたのだろう。昨今はIT化が進み、何でも映像や写真で見られる便利な時代になったが、実際にその場に身を置くことによって感じるパワーや雰囲気までは、バーチャルな世界では味わえない。本物に触れることの大切さや意味を、息子、そして息子を通じて私自身も学んだ。

ダイナミックな海を親子で満喫（フィジー）

フランスのルーブル美術館に行った際には、息子にカメラを持たせ、事前に一緒に選んだ名画と記念撮影をしながら回ることにした。もともと宮殿だったという広く豪華な館内に驚きながらも、一生懸命地図を見て絵画を探す。冒険心をくすぐるのか、息子はやる気満々で案内をしていたが、やがてダ・ヴィンチ作の『モナリザ』を発見し「あれ？ちょっと小さすぎるな」と一言。思わず噴き出したが、確かに絵画は写真で見る機会も多いため、つい知っているつもりになりがちだ。素直な一言で、その大きさまでは写真では分からないことに改めて気づかされた。ちなみに息子の撮影した写真は大人の視点とは全く違いユニークで、私も子供の目線で作品を眺める新鮮な機会になった。

駅舎だった名残の時計を撮影
（パリ・オルセー美術館）

旅で社会性を身に着ける

人と触れ合うことの多い旅は、社会性を身に着ける場としても、いい機会だ。あいさつをすることから始まり、特に公共の場

で過ごすことの多い旅は、マナーなどを教え実践させるには絶好の機会と言える。わが家では、言葉を理解するようになったころから、旅に出る前にはいくつかの約束をして出かけることにしている。どれも特別なことではなく基本的なことだが、できた時にはきちんと褒め、約束を守ることの重要性を伝える。また、旅先で出会った人に「小さいのに静かにしていて偉いね」「お礼がきちんとできてすごいね」と褒められることも多く、それが何よりも子供にとってはうれしく自信となり、次へつながるという良い循環になっているように思う。

学びと旅の密な関係

小学生になると、学校で知識として習得したことが実生活でどのように役立つかを意識して旅をするようになった。実践で役立つことが分かれば、学習に対しての意欲や興味・関心の幅も自然と広がると、夫婦で考えてのことだ。地図を見て旅先とルートを一緒に確認し、電車に乗る時には出発までの時間や切符を購入する際のおつりをクイズにして出すなど、ちょっとした隙間の時間を工夫している。駅の看板を見て「あの漢字習ったよ！」とうれしそうに息子が言えば、駅名にある他の漢字の読み方も一緒に教える。すると子供というのは、うらやましいくらい吸収が早くすっと頭に入る。学年が上がれば、授業で歴史も習うだろう。「知識を実物を見て深める」そんな旅をする日を歴史好きの夫は心待ちにしている。

旅先の出来事が学びにつながることも多い。北マリアナ諸島のロタ島で見た星空は、「星が降ってくる」という言葉がぴったりで、手が届きそうなほど見事だった。それ以来、旅先には必ず星座の本を持参し各地の空を親子で見上げている。また新潟県の清流では、蛍光色で黒い羽を持ったトンボのような虫を見かけた。「トンボかな？」「でも羽は、チョウみたい？」取りあえず写真に収め家で調べることに。こういった時にＩＴは本当に便利だ。あるサイトで、どうやら「ハグロトンボ」というらしいことを突き止めた。旅に出なければ一生出会わなかっただろう虫の名も、新潟の美しい景色とともに記憶にインプットされた。

旅で育む家族の絆、生きる力

子供に教え、一緒に考え、学び、旅をしてきた八年間。年齢とともに旅のスタイルは変わってきたが、旅を通して家族の絆を深め、旅に学ぶことは変わらないし、これからも変わることはないだろう。現在はインターネットも普及し、家に居ながら得られる情報量は格段に増えた。ネット上でコミュニケーションも容易にとれる便利な時代だが、やはり実際に旅をして「本物」に五感で触れ、そして旅先でさまざまな人と出会い交流する時の心の動きや想いは、また違った格別な体験である。それを幼いうちから身をもって知ることは、「他と調和し、自分らしく生きる力をはぐくむ」というわが家の子育てのテーマと深く関係し、人生の指針、心の糧になると信じている。

子供は日々大変なスピードで成長している。旅を通し、今までも親として多くを学ばせてもらったが、これからは旅先で子供に教えてもらうことや、頼りにすることもきっと増えていくだろう。親子の関係が変われば家族旅行のスタイルも変化する。これから、どんな旅のページを刻むのか……。今から大変に楽しみだ。

（むらた　かずこ）

二〇〇号特別企画座談会……（前編）

「旅は世につれ」

観光文化二〇〇号特別企画として、長期にわたり連載をご執筆いただいています池内紀、山口由美の両氏をゲストに招き、座談会を開催しました。旅とのかかわり、旅のスタイル、旅のノウハウ、今後の観光のあり方など、旅が生活の一部になっておられる両氏の旅に対する深い思いをお伺いしました。なお、座談会は昨年十二月三日に行われましたが、今号および二〇一号の二回にわたり掲載します。

旅と「逃避」

外川　本日は本誌に連載いただいております旅の達人、池内さんと山口さんをお招きし、「旅は世につれ」と題して旅談議をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

お二人には大変長い間連載を続けていただき、大変感謝しております。私から、読者を代表していろいろなことをお伺いしていきたいと思います。まずはレディーファーストということで、山口さんにお話を伺っていきたいと思います。

山口さんには毎号、女性らしい観察眼を駆使した原稿を書いていただき、大変楽しく読ませていただいております。連載「ホスピタリティーの手触り」は二〇一〇年七月号でちょうど十周年ということで、本当に長期連載となりました。参考までに、お二人の連載の軌跡を一覧表にまとめさせていただきました。まずはこの一覧表をご覧になって、ご自身の感想を頂ければと思いますが。

山口　まずは、だぶったネタがなかったかなとちょっと心配になりました(笑)。こうして見直してみると、あのころはあの国に行ったなとか、そういうことが改めて思い出されますね。その時期に印象深かった話を書くことが多いので、自分自身が行った旅の軌跡でもあり、懐かしいなと思います。

この『南洋遊記』は、富士屋ホテ

司会進行
外川 宇八
とがわ うはち
財団法人日本交通公社
「旅の図書館」
『観光文化』編集長

出席者
渡邉 サト江
わたなべ さとえ
財団法人日本交通公社
「旅の図書館」館長

池内 紀 氏
いけうち おさむ

1940年兵庫県姫路市生まれ。ドイツ文学者・エッセイスト。カフカ、ゲーテの新訳、評論をはじめ、ドイツ語圏の文化をつづったエッセイ、山・川・温泉・自然や動植物に関するエッセイ、テーマ別人物列伝、演芸・歌舞伎論など、執筆範囲は多岐にわたる。

山口 由美 氏
やまぐち ゆみ

1962年神奈川県箱根町生まれ。慶應義塾大学法学部法律学科卒業。海外旅行とホテルの業界誌紙のフリーランス記者を経て作家活動に入る。旅とホテルをテーマにノンフィクション、小説、紀行、エッセイ、評論など幅広い分野で執筆している。日本旅行作家協会会員。日本エコツーリズム協会会員。

ルの経営者だった大叔父の山口正造が出した本です。一八八二年（明治十五年）に生まれて一九四四年（昭和十九年）に亡くなった人ですが、一九二八年（昭和三年）に東南アジアを旅した記録です。なぜ東南アジアなのかといえば、ホテルの経営者として、お客さんと話をするために自分もアジアを知っておきたかったから。――というのは表向きで、実は自分が南洋好きだったんです。

外川　山口さんは非常にタフに旅行されているという印象ですが、そもそも旅を生業とするきっかけは、ご著書にも書かれているように、恐らくお母様のＤＮＡがかなり色濃く伝わっているのではないかと思います。そのあたりはいかがでしょうか。

山口　そう思って、今日は母が遺（のこ）した原稿を元に書いた雑誌を資料として持ってきました。残念ながら、この雑誌はあっけなく廃刊になってしまったので、連載は四回くらいで終わってしまったんですが。母はトラベルライターとして仕事をしていて、とはいえそれほどの仕事もせず、三十九歳で早く亡くなりました。その母が遺した本にならなかった原稿がありまして、それは旅のマナーの本なんですね。形にならないまま私が持っていたんですが、一時期は「これは古すぎる、役に立たない」と思っていた。ところが、時を経ることで新たな意味を成すようになってきたことに気づいたんです。一九六五年（昭和四十年）くらいの旅のあり方なんですが、今思うと、どこかノスタルジックで、私たちが忘れてしまった、海外旅行に行き始めた当時の日本人が一生懸命頑張って旅していたころの気持ちがよく表れていて、かえって新鮮なんですね。

池内　六五年の初めくらいですか。

山口　いえ、もう少し後です。一九七八年に亡くなっているので、正確に言うと一九七五年前後ですね。

池内　僕は一九六六～六九年にウィーンにいて、それからほぼ毎年行ってたんですが、年々海外に行く人が増えてきたなっていう印象は、よく覚えていますね。最初に六六年に行った時は、日本人がウィーンの街を歩いていると割と目立ったんですが、七五年ころになるとあまり目立たなくなっていったという感じでしょうか。

山口　多分、ジャルパックとかルックの時代でしょうね。

渡邉　私が入社した時にルック部（ＪＴＢ）ができているので、多分そういうツアーが盛り上がり始めたころですね。

山口　母がトラベルライターとして活動をしていたのは、オイルショックの落ち込みの後だと思います。

外川　トラベルライターとして、山口さんの先輩なんですね。

山口　ただ、こんなふうに自分の親のことを言うのはなんですが、あまり文章がうま

昭和３年に東南アジアを旅した記録、『南洋遊記』

くないんですね（笑）。それは残念なことだなと。

池内　旅行するということだけで精力を使い果たして、書くまでの余裕がなかったのかもしれませんね。

山口　世の中も、海外に行ったというだけで行った人の情報を欲しがった時代なんですよ。今はみんな行けるから、行ってもそれなりに書けないと誰も読んでくれないけど、当時は行っただけですごいことで。

あと、母はホテルの中で育っていて洋式のライフスタイルを知っていたので、いざ行く段になっても洋服やテーブルのマナーなどでさほど不自由をしなかったんですね。それがまた重宝されて。

あのころは皆さん、何も分からず手探りで、あっちではお風呂はどうなってるんだ、という感じで、どちらかというとそういうことを解説するような……。トラベルライターも今とはちょっと性格が違ったんでしょうね。今はナイフとフォークの使い方なんて誰も言いませんけど、それが海外旅行の本には必要な時代だったんですね。

当財団応接室にて

外川　そこから始まってたんですよね。私も大阪万博が開かれた一九七〇年にＪＴＢに入社したんですけれども、当時はいろんな団体旅行の前に説明会を開いていました。食事のマナーも然（しか）り、海外は危険が伴うといったことも、すべて説明していました。

山口　その時代は農協観光さんのツアーが盛んだったということで、洋式のバストイレは見たことがないから、農協観光で小さな洋式バスのセットを用意して、それを見せて説明したとどこかで聞いたことがあります（笑）。

外川　いずれにしても、期せずしてお母様の遺志を継いでお仕事をされているということだと思うんですが、それは、意識しないうちに自然とそうなっていったということでしょうか。

山口　そうですね。私は、小さいころはよく母に旅行に連れていってもらったし、すごく身近に旅があったのですが、小学校や中学校くらいの時は、弁護士など資格に裏打ちされた堅い仕事に就きたいと思ってたんですよ。母がやっている浮き草のような仕事だけは絶対にしたくないと思っていた

のに、あれ、どうしたことかなと。

外川　まさにDNAですよね。

池内　やはり、どこか「こういうのもいいな」というのはあったんじゃないですか？

山口　そうですね。好きなことではあって、やっていると一番心地よいことだったんですね。でも、何となく「気持ちいいことだけやってちゃいけないんじゃないか」みたいな気持ちは若いころはあって。だから、これは最後の選択肢にしようと思っていたら、次々とほかの選択肢がもろくも崩れ去り、気がついたら最後の選択肢で……。でもやっぱりやってみると本当は一番やりたい仕事で、一番楽しかったというか。

外川　お二人には「旅の図書館」の三十周年の時にご講演いただいたんですが、池内さんはその時にご自分の青春時代の旅のお話をされて、確か高校在学中の時……。

池内　高校二年の時に本州一周しましたね。

外川　その旅の詳細を鮮明に記憶されてて、すごいなと思ってたんですが、そもそも旅とのかかわりというのは、そこから始まったんでしょうか。

池内　具体的にはそうですが、どこか遠くへ行きたいという気持ち、これは男と女ではちょっと違うのかもしれないけれども、男の中にはいつも「ここじゃなくどこか遠くに行きたい」、心の底にそういう思いがあるような気がします。私は小さい時から肉親が次々と亡くなったものですから、周りから人がどんどんいなくなって、自分たち子供だけが残されていくという一種の恐怖感がありましてね。それと、田舎の古い大きな家ですから家が怖いという感じがあって、どこかここ以外の所に行きたいという気持ちが小さい時からありましたね。

　高校生になると、アルバイトができるようになり、小金を自分で作れるとなると、それを即つぎ込んで旅行に行く――。だから、普通で言う旅行好きとはちょっと違って、自分が育った状況の影響があったと思いますね。

山口　逃げたいという気持ちは旅の一つの大きな理由というか、私も旅の原点には逃避があると思うんですね。どこから逃げてるのかというと、私も出身地の箱根から逃げているんですけど、居る場所に何か自分にとって心地よくない部分があったりすると、おのずと旅を目指しますね。

池内　そうですね。そういう一種の逃走の思いとともに、旅に出た時の自由さというんですか、あれがたまらなくうれしいんですね。いつも宿に泊まった明くる朝一番に宿を出て歩く、旅の始まりの時の、全身の、足が躍るような喜び。日本であろうと外国であろうと同じような喜びがあって、「これが自由だ」って、本当にうれしいですね。

外川　そういった若者のような気持ちをずっと持ち続けていらっしゃる。

池内　いまだに変わらないですね。

外川　私も、男として今の池内さんのお話に共感できる部分があって、山のかなたじゃないですが、漂泊なんて言葉が使われたりしますけど、やっぱり外の世界に対するあこがれとか関心がかなり強烈にありますね。

池内　そうですね。高校時代に初めてふるさとを離れて二週間ばかり旅をしたのと、二十代半ばからヨーロッパに行ったのが大きかったと思います。二十六歳の時に奨学資金をもらって、その時すでに教師をしていたので大学から言えば出張なんですが、別に何の仕事もしない、オーストリア政府奨学生という名前で月々お金をもらって。

山口　あちらでは、大学の授業に通ったり？

池内　一応名目は書類を作って、なんとか

研究所というのに所属の登録はしたんですが、ここで勉強しなきゃいけないんですかと聞いたら、「あなたのお好きなように」と言われ（笑）、向こうはそれしか言いようがないから、登録だけしてカードだけ出してもらって、あとはまったく自由に過ごしていました。

外川　世の中全般に、自由っていうか……。

池内　そういう自由さが、どこの社会にもあったような気がします。それで二年間ばかり好きなように時間を過ごして、ウィーンを足場にしてイタリアとか東欧とかあちこち旅行したものですから、日本国内での旅行と海外の旅行をちょうど十代と二十代でして、一通りの修練をした、そういう体験が大きいですね。今でもそれが生きているような気がします。

外川　当時はヨーロッパに旅行する日本人も非常に少ないですね。海外旅行の自由化が一九六四年（昭和三十九年）ですから、その直後ですね。

池内　外貨の持ち出し制限はありましたね。僕の場合、留学でしたから、口座を開いて日本から送ることができて、その点は割と楽でした。公用旅券のせいで旅行の制約はありましたね。オーストリアから西ドイツに行くにも何か手続きが要るとか。

山口　そのころに日本人がヨーロッパに行く時ってビザが必要でしたか？

池内　取りましたよ。東欧は共産圏で非常に難しい状態でしたから。ただ、今考えるとその条件を体験したのが、僕には非常に貴重だった。一歩国境を越えると全く自由が利かない、道路一つでそういう状況があるというヨーロッパの厳しさが、よく分かる。

外川　東西関係がまだ緊張していたころですか。

池内　ちょうどプラハで自由化が進んで、そこにソビエト中心の軍隊が入って武力で制圧するというチェコ事件が、僕が行っている間に起きたんですね。それは非常に印象的でした。オーストリアとチェコはほんの隣同士ですしね。プラハとウィーン双方に親戚のいる家族もある。国境の向こうの実況が刻々と入ってきて一時間おきくらいに号外が出てたんですね。地鳴りのような音がして、それは戦車の音で、ウィーンの街に人が全然いなくなってしまって、みんな家でテレビかラジオにかじりついているし、喫茶店にいると次々と号外が配られてくる。その三日間くらいは非常に痛烈な体験でした。一九六八年です。そういう事件に立ち会った。若かったですからね、二十代ですから面白くてしょうがなかった。

秘境とのかかわり

外川　山口さんは、いわゆる異境の地といった国をよく旅されていて、相当勇気がないと行けないような国にも行かれています。やはりそういった国に行きたいと思われたのですか？

山口　行きたいから行ってるんでしょうね（笑）。アフリカなどに行き始めた最初のきっかけというのが、私が大学卒業後に就職した会社の同期に、青年海外協力隊でアフリカのザンビアに赴任したとても仲良しの女友達がいまして、彼女が別れ際に「遊びにきて」と言ってくれて。恐らくみんなに言ったと思うんですけど、実際に遊びにいったのが私一人しかいなかった（笑）。それを言われた時に、大抵の人は、「ザンビアか、私とは関係のない国だな」と思い、社交辞令で「そうね」と言って終わるんでしょうけど、私はザンビアと聞いた時になぜか「もしかしたら、このチャンスを逃したら、

ザンビアには行けないかもしれない」と思って、それで本当に計画して行っちゃったんですね。

私と秘境のかかわりってそういう感じで、パプアニューギニアもそうなんですけど、何かかかわる小さなきっかけがあった時に、普通の方は恐らく、「知らない国ですね」で通り過ぎるけれど、私は「このチャンスを逃したらパプアニューギニアに行けないかもしれない」って本能的に思ってしまって、その積み重ねなんですね。

アフリカのナミビアの砂漠も、非常に気に入って何度も行っているんですが、どうして最初に行ったかというと、たまたま南アフリカでトラベルマートの取材に行ったら、観光に乗り出したばかりのナミビアがブースを出していたんですね。そこに砂漠の写真がどーんと飾ってあって、うわーすごいと思っていろいろ話を聞いていたら、そのブースを出していた旅行会社の人が「日本からのジャーナリストは珍しい。来るんだったら七割引きでいい」と言われて（笑）。その時も同じ感じです。せっかく南アフリカまで来ていて、このチャンスを逃したら、この砂漠に行くチャンスはないかもしれないと思って、その場で帰りの飛行機を数日延ばして、その七割引きの旅行に乗ったのが最初だったんですね。

外川　すごいですね。まさに青年は荒野を目指すって感じで、軽々と飛んでいくところが。これは持って生まれたものだと思うんですが。

池内　いつも連載を拝見していて、なかなか踏ん切らないと行けないような所に、ごく自然体で行ってらっしゃるなと感心しますね。

外川　そうすると、このザンビアの旅がきっかけで、異境の旅にはまってしまったという感じですか？

山口　そうですね。アフリカに関してはザンビアがきっかけでしたね。アフリカに一回行っていることが、次にアフリカの話が来ても、なんというか自分の領域みたいな（笑）。ヨーロッパに行ってまた行く、というのと感覚は同じなんですよ。だから南アフリカの話が来たときも、「ああ、南アならザンビアよりずっと進んでいる所だから」という感じで受け止めて、二度目のアフリカがこの南アフリカのトラベルマートだったんですね。で、行ったらこんなすごいものを見ちゃった。そのあたりから自分で積極的にアフリカに行く機会を見つけるようになったという感じです。

外川　ナミブの砂漠は地球の砂漠の中でも一番古い砂漠だそうですね。

山口　そうです。

外川　ヨーロッパの人なんかはよく行かれるようですね。

山口　フランス人が好きですね。行くといっぱいいます。フランス人は自分たちの植民地に砂漠が多いせいでしょうか。ハネムーンなどでも来ていますね。

池内　アンチ文明みたいな世界が、逆に旅心をそそるんでしょうね。

外川　今、本当に海外旅行が当たり前になってしまって、海外旅行に行くときめきみたいなものがだんだんなくなってきてるんですけど、こういう砂漠の写真を見ていると、見てるだけで異空間に引きずり込まれていく感じがします。実際にこういう所に立つと、そういった感覚はかなり強烈ですか？

山口　ああ、ありますね。いろんな所に行くと、なかなかびっくりはしなくなってくるんですが。恐らく文明国ではそれなりにいろいろ感じることはあっても、「うわっ」

という、想像を超えた感じはない。だけど、この砂漠にはそれがありますね。今までの自分の風景のコレクションの中にないような感じ。

外川　旅行業に生きている人間は、まず最初にこういった地域は食べ物はどうなのか、水はとか、いろいろと心配が出てきてしまうんですが、実際はいかがでしたか。こういった地域を旅行されて。

アフリカ、ナミブ砂漠の砂丘にて

山口　多分あまり気にしない人間なんだと思います。よく言うんですが、私は頭の中に味覚のチャンネルがいくつかあって、食べ物が貧困な地域に行った時には、おいしいと感じるチャンネルを一つずつ下げていくんですね。どうもそれができるみたいなんですよ。ポロリと言って面白がられたのは「ああ、これイースター島にしてはおいしいね」とか（笑）。その土地のレベルに応じて判断するというか、そのスイッチを変えられるかどうかじゃないかと。

外川　適応力がすごいんですね。

池内　旅ができる大事な条件ですね。

山口　それは国内でもどこでもあると思うんです。ここではこれ、と言われた時に、快適にするためにちょっと自分のギアを変えていますよね。恐らく無意識のうちに。

池内　食べ物がひどければひどいのを喜ぶ、面白くするというのはありますね。

外川　ある意味、気持ちの余裕というか、日常生活から離れた所に行くわけですから。

山口　そう、だから家と同じことを求めちゃいけない。

外川　違うのが当たり前だという感覚を持っていれば、何があってもそれを楽しむ気持ちの余裕があって、山口さんはそういう余裕が体質的にあると……。

山口　そうですね。あとは、よりひどいものを楽しむっていうのもあって、私は、あり得ないような所に日本料理屋を見つけた時は行くようにしてるんです。そうすると、想像を絶するものが出てきます。それは日本料理が懐かしくて行くんじゃなくて、強烈な体験を求めて行くみたいな。そういうのが私の習性としてあるんじゃないかな。

池内　こんな所にまで日本人が来て、という関心もあるんじゃないですか？

山口　いえ、そういう所にまで行くと、日本人ではないケースの方が多いですね。例えば、ちょっと日本に住んだことがあるメキシコ人とか。そういう人が日本料理と称してて、日本料理と本人は信じているのに、

ほとんど中華料理だったり。

池内　それも面白いね。

山口　そうなんです。本人は日本を懐かしんで、池袋の話をしたりなんかして（笑）。

外川　それってすごく大事だなと思いますね。山口さんが旅行されている所は、なかなか一般の人が行けないような場所なんですが、気持ちの上で冒険心を持っているかどうかって大きいと思うんです。今、日本人が世界中いろんな所に行っているといっても、大抵は管理されて安全に、ガイドブックに載っている所を見ただけで満足しちゃって、それだと新しい発見などはないですよね。ドキドキ感とか達成感はないと思うんですけれども。ちょっと冒険心を持って少し外れてみると、いろんな経験ができる。そういった経験があると、帰ってからもいろいろと思い出に残るんです。旅行もいろんな商品がありますが、限られた時間の中でもちょっと冒険心を持って行動すると、新鮮な発見ができると思うんです。

池内　ツアー旅行というのは、安全にお連れして連れて帰るのが大きな使命だから、どうしても管理されて安全な旅をストックして渡すという形になりますね。そこがある意味、旅の本来の意味と矛盾するわけですね。思いもかけないことがあって、そこで自分がどう対処したか、どんな体験をしたかが、いわば旅の醍醐味で、それとツアー旅行的な旅の方向とは、本質的に逆なんですね。

　ただ、今の時代では「じゃあ冒険してごらん、中高年のおじさんにも面白いよ」と言っても、やはり若い時に一人きりで体験してないと自信がない。おびえがあると、行動自体が危険になってくる。若い時に痛烈に体験していると、ガイドブックやパソコンから得た知識ではなく、体が覚えた知識が最終的にはリスクを超えていくんでしょうね。そこが今の旅行の流れの中では難しいところですね。

外川　トラベルはまさにトラブルと表裏一体ですから、ある意味、それは当たり前だということで旅はあったわけであって、かつての海外旅行はまさにすべてが未体験でしたから、おのずと感動も大きかったですし。

池内　よく、旅行から帰ってこられた方のお話を飛行機の中で聞いていると、「私、一人だけはぐれちゃって困ったわよ」と途方に暮れたり困ったり、思いもかけないことが印象に残ってて、あと回った名所は、あれはどこでしたっけとか（笑）。

山口　安全だった所の記憶はあまり残らないんですよね。

池内　そう、皮肉なことにね。かといってリスクいっぱいの旅を募集するわけにもいかないけど、基本的に旅というのはリスクがあるから面白いし、体験するに値するという気はしますね。

外川　本当にそういった経験・時間を持つことは旅の印象にかかわってくるので、やはり安全面を考えながらやっていくことが大事かなと思いますね。

山口さんはいろいろな場所に行かれているわけですが、私が感心させられたのが、連載23回目の「観光によせる思い」。パプアニューギニアのトビーという所に行かれた時のことを書かれてるんですが、この中にその土地の人が言った言葉で「観光は伝統を未来の世代に継承する術」というのがあります。

観光と自分たちの生活や自然をいかに共存させていくかは大事なんですが、ややもすると相反する場面が出てくる。しかし、パプアニューギニアの方がこう言っているということは、やはり暮らしていかないといけないですから、きちんと生業は必要で、そういった時に、ある意味でやはり、自分たちの暮らしをさらけ出すことによって自分たちが暮らしていけると。そのために観光はやはり大事なんだと言ってて、これはエコツーリズムそのものではないかという気がしたんですが。こういった地域について書かれたものを読むたびに、発展途上にある国にとってエコツーリズム的な考え方は重要だなと感じます。

山口　私は日本エコツーリズム協会という組織に一応入っていて、いつも会報などが来るんですが、日本人って、まずエコツーリズムとは何かと頭で考えてしまうようなところがありますよね。実践するより前に、エコツーリズムとは何かと会議室で論議して、定義を決めて、それで終わってしまって、エコツーリズムとはこうだと納得してしまうみたいな。

私は別にエコツーリズムたるものをしようと思っていたわけではなくて、ある時、ふとその人たちを見たら、あれ、私が普段行ってるのってエコツーリズムかもしれないと思って。だから逆ですよね。目の前にあるのが皆さんが名付けているエコツーリズムだったと気づき始めた。それで言うと、パプアニューギニアのツーリズムはすべてエコツーリズムなんです。大きな立派な箱があるといったマスツーリズムのできる所が一カ所もない。観光はすべてビレッジツアーなんですよ。村に行くこと。たまたまその村に滝があれば滝の観光になるし、踊りをしていればダンスの観光になるし、料理を作ってくれれば特別ランチという格好になるし。だけど結局何かっていったら、村に行ってそこでの暮らしを見てるだけということに、ある時気がついて、観光という視点から見ると、ものすごく新鮮というか、いいことを言ってるなと。

なんで、といえば、それが彼らにとっての唯一の現金収入だからなんですよね。例えば、パプアニューギニアの山あいの都市に小さな旅行会社があって、そこで新しいツアーを考えようとなると、順番としてはまず知り合いに声をかけるんですよ。お前たちの村には何があるか、と。そうすると、うちにはこんな岩がある、とか、滝がある、こんな踊りができると。そして、それらの村に行くんですって。で、この岩は大したことないとか、この踊りならいいじゃないか

とか、見て、そうやってツアーを作るんだと言われて。これが東京の会議室で難しいことを言っている、エコツーリズムの本質ではないかと。それを日本にも当てはめれば、うちの村にはこんな森があります、うちの村ではこんな草履が作れます、それを日本で観光にしたら、それは立派なエコツーリズムになると。パプアニューギニアはそういうことを教えてくれた場所なのかなと思っています。

外川　もちろん、そういった地域では大量にお客さんを迎え入れることはできないと思いますが、そのような形でツーリズムと環境が共生できているというのは非常に大事なことだと思いますし、うまく持続してほしいと思いますね。

山口　まず、彼らはうれしいんですよ。自分の村の景色なり、食べ物なり、鳥なりをわざわざ見によそから来てくれるわけですから。これは原点なんですけど、うれしくってしょうがない。特にお客さんの受け入れが少ないような地域だと、「今日で外国人が来たのは二度目だ。今日はすごくうれしい」と。そして「うちの森には、普段は朝と夕方にしか出ない極楽鳥が昼も出る。だから、絶対にお前には昼の極楽鳥を見てもらいたい」と言って、村長の弟が私を森に連れていくんですね。しっかり手を握られて、ぎゅうぎゅう引っ張られながら行くんです。で、もう出ないからいいんじゃないかとこっちが思っても「いやだめだ、出るまでお前を帰さない」と言われて。でもそれって、要は誇りですよね。自分の村の森はこんなに立派なんだ、それをよその人が来て喜んでくれるのがうれしいと。それがすごく伝わってくるんですね。

外川　つくづく思うのは、そういった地域は人間が素晴らしいというか、そういう人と触れ合うことの素晴らしさが文章からも伝わってきます。連載3回目に、パプアニューギニアで特別な客人として接遇してくれる話がありますが、ホスピタリティーの原点というか、そういう気持ちが大事なんですね。

日本の地方の変化

外川　池内さんの連載は、日本のいろいろな町や村を取り上げていらっしゃいますが、同じようなことは、日本の旅においても言えることでしょうか。

池内　やはり、マニュアルじゃないホスピタリティーに当たるものっていうのは、こちらが構えていると出くわせないですね。構えをなくしてその土地土地の人の生活を、同じような目で見る、同じような言葉は使えなくても、暮らしなり地域性なりにある程度、自分で知識を持って、その中で訪ねたりお願いしたりすると、非常に溶け込めますね。

　僕は基本的に一人旅ですから、そういうことが非常にしやすいんですね。仲間との旅や集団の旅では、なかなかそれができないでしょうけど。

外川　連載を拝読していて感じるのは、地

元の人の中にすっと入っていかれて、隣に住んでるかのように会話に入っていけるのはすごいなと。

池内　大抵、タクシーの運転手さんがまず情報源ですね。よそ者だと分かると、普通では言えないことをしゃべってくれたりして、こちらもちょっとカマかけますしね。

渡邉　先生は以前にご自分のイントネーションが人の心を和らげるんじゃないかとおっしゃっていましたね。

池内　ああ、それはあるでしょうね。僕は兵庫県の姫路出身で、ちょっと関西なまりがありますから。

山口　標準語にはちょっと冷たい響きがありますものね。

池内　語り方は関西口調で、その土地のことをヘンによく知っていて、国籍不明みたいな感じだから、割と入りやすいのかもしれない（笑）。それに好奇心が強いもんですから、先に調べることもガイドブック的なことではなく、歴史とか地誌とか、江戸時代の古文書とかね、そういう話をふっと出すと、向こうの人が「えー、よく知ってるな、俺だってよく知らないよ」みたいなことを言って、それだったらあの人の所に行けと。行く先々で、例えば商工課のサタケさんの所に行きなさいとか（笑）。そういう人につかまると半日つぶれてしまうから、どうしようと思うんですが、行くといろんなことを教えてもらえる。そういうつながりは割と作りやすいですね。

外川　池内さんの連載「あの町この町」は二〇一〇年一月号で三十七回目を迎えました。

池内　最初は一年か二年くらいかなと思ってたんですよね。

外川　もう丸六年たちました。北は北海道から南は九州まで、沖縄を除いてほぼ全国制覇されていて、元気な所を取り上げていただいていると思うんですが、見ていると城下町、宿場町が多いですね。これはやはり歴史に対する関心の高さからでしょうか。

池内　そうですね、やはり自分の好みがどうしてもありますからね。それから、書くに値する町というのは、どこか歴史、過去を多く持っている町。その方が懐が深いって感じがしますね。今は

惨憺（さんたん）たる状況ですけど、商店街にあって教科書も文房具も扱っているような町の書店は、非常に大きな情報源だったんですね。そこに地元の人の本、地誌とか郷土史家の本があるかどうか確かめます。そういう本がある町には書くに値する歴史があるし、そういうことをコツコツ調べている人やグループがあるし、それがあれば、もうしめた、ということで、この町は何日間いても飽きない。そこで仕入れた本を宿で読みます。お土産は買わないけど、土地の人が作った本、いわゆる郷土本を買いますね。わが家にはそういう本が壁一面埋まるくらいありますよ。

山口　私もそれは無意識のうちにしていましたね。言われてみると、やっぱり本屋さんで無意識のうちに郷土本コーナーに行ってます。

池内　ただ、薄い本でも高いんだよね。ああいう本は（笑）。

山口　そうそう。果たしてこの本を買う意味があるのかな、とずいぶん考えたりして。

池内　本屋のおばさんに言うと、こんなの買うの？みたいな顔されて、上の棚からよっこらしょって取り出して値段見たら、えっ、二千八百円？とか（笑）。でも、そこから口がほぐれていろんな話が聞けますから、それもまた楽しい。

外川　池内さんの旅のあり方も年代とともに若干変わってきていると思うんですが、旅行にあたって、あらかじめいろいろと調べて行かれてるんでしょうか。

池内　この連載の初めの方は、「なんとか郡なんとか町」というような小さな町をなるだけ丹念に調べてみたいと思って始めたんですね。それが、平成の大合併によって由緒ある町の名前が消えてしまうようなとんでもないことになり、だったら町にはこだわらずということにしました。ただ、書きたいのは日本の社会の一つのサンプルとしての都市であって、例えば長崎県の佐世保市だったら佐世保っていう町の特徴を書いて、それがほかの町にもある程度通用しないかなと。代表選手みたいな形で書きたいなといつも思ってるものですから、二〜三カ所の中から一つ選ぶというケースが多いですね。書くために行ったというより、行ってみて書けるかなというのと、これは書きたいというのと、これはちょっと無理かなというのとありますね。

山口　行って失敗だったこと、書けると思って行ったのに全然無理だったことはありますか？

池内　最近は多いですね。町自体が寂れてしまったり、合併しなかったからよほど自立心が強いのかと思ったら、周りのどこにも敬遠されたという感じだったり……（笑）。必ずしも書くことを前提にして行ってはいないのですが、地形的・規模的に、また歴史的に見て書きたいなと思って行ってもあまりにも寂れてるとねえ。タクシーの運転手さんなんかも投げやりで、「眠った町とかいうけど、うちのは死んだ町だからね」なんて言ったりして。

外川　確かにここ何年かで、地方の疲弊が急激に進みましたね。

池内　そうですね。それが見えてきましたね。よく、「日本の旅行、楽しいでしょう」と言われますけど、「いやあ、日本という国を旅していると絶望的になる時もありますよ」と。中央と地方という言い方は僕はあまり好きじゃなくて、どこも中央であり地方であると思うんですが、東京という巨大都市にこれほど多く集中してしまっていて、それ以外がこんなにひどい状況になってる

というのは、国として非常に珍しいと思います。

ドイツやオーストリア、東欧にはよく行ってましたし、今も行きますが、どんな小さな町にもそれぞれの特色があって、日本のように、疲弊が日増しに広がっているような国はかなり異様だという気がします。だから余計に、地方の町おこしをやっている人たち、成果を出している所は書いてみたいなと思います。

外川　そういった点で、歴史ある町はもっと自分たちの歴史に注目したり、地域の伝統的な産業をもっと現代流に再生させるとか、そういった取り組みは必要になってくるんじゃないかと思いますね。現実に、頑張っている所はありますか？

池内　ええ、たくさんありますよ。どこでも、町おこし、町づくり、地域おこしといった言葉がほとんど合い言葉になってますね。一人リーダーがいると違うんですよ。すぐに五人くらいのサブリーダーが出てきて、その周りに頼りになる若い人、お年寄り、おばさん、グループなりチームができる。日本人って非常に優秀で有能なので、立ち直る可能性は大いにありますね。

外川　山口さんがお書きになっている海外のエコ的な旅行と日本の地方も、ある意味通じる部分があるんじゃないかと思うんですが、大きくやろうとすると無理がありますから、もっと自分たちの日々の生活などをうまく発信して、そういったものに関心のある人に来てもらう――。日本の地方も人口が減ってきてますから、ツーリストに来ていただいて、自分たちの生活を体験してもらうとか。

山口　パプアニューギニアにあって、もしかしたら日本に欠けてるのかなと私が思うのは、地元に住んでいる人の絶対的な自信じゃないかなと。ものすごくまずいものでも、ものすごくうまいものだと思ってますからね。多分、あまりに東京がすごいから、そこに引け目みたいなものを地方の人が感じていて、「いやー、こんな田舎の料理ですから」みたいな気分がいろんなところに出ちゃっていて、「東京なんかよりすごいんだ」っていう、堂々とした誇りがあるかないか、なのかなあという気がするんですけど。

池内　よく旅行していて「どこから来られましたか」と聞かれますね。東京からと答えると、何となく違うんですよ。東京って言うと、これはこれはよく来られましたって、心なしか言い方が違うんですよね。そのあとは「うちはなーんにもないとこなんですよ」と。

山口　「東京なんかからこんな田舎に来て、何か面白いですか」と言われたりして。

外川　アフリカやパプアニューギニアなどは、自分たちの生活に誇りを持っている点がやっぱり違うんでしょうね。

山口　地球上には東京やニューヨークという所があって、全然違うってことくらいは分かってるんだけど、じゃあ、そこから来た人間に引け目があるかというと全然違うし、自分たちの生き方や文化に自信がある。

外川　今、何が一番問題かといえば、地方が自信喪失になってるということがある意味、大きいかもしれないですね。

池内　そうですね。若い人がどんどん出ていくとか、何をやるにしても人がいないとか……。以前は「お国自慢」という言い方があって、自分たちの郷里はいいんだ、と小さい時はやはりそういう気持ちが強かったですよね。どのへんがその分かれ目だったか分からないけれど、経済成長で偏りが生

じた時に、いわば富が収奪される地方の人々の中で自信がなくなってきたという状況はあったし、今でもあるでしょうね。

しかし、東京のような大都市の、これだけの人と物量と便利さがある生活っていうのは、僕なんかいつまでも続かないと思ってますけどね。こういう都市生活は二一世紀の宿命で、ここまで自分が生きてきたからにはここで生きるしかないと思ってますが、よくリタイアした後は地方住まいしたいとか、また別の地方生活を自分たちで作っていこうという人たちも出てきています。

山口　そういう外から入ってきた人たちが、町おこしの中心になることもありますね。

外川　ある意味で、戦後の経済成長とともに若い人がどんどん都会へ都会へと来たんですが。経済が縮小している今、過度に東京に集まったものを地方に戻していかないといけないと思いますし、例えば都会でいろんな腕を磨いた人が、地方に帰って自分の今までやってきたことを生かせれば、かなり違ってくるのではないかと。

例えば有名なレストランが地方にできて、地元の旬の材料を使えば、わざわざ遠くから食べにくるということもありますし。地方には地方の良さがあり、そこに若干都会的なものが加わればいいかもしれませんね。

池内　今、情報などについては東京も地方も全然差はないですよね。リアルタイムで同じ情報が動くわけですから、地方に暮らしているから情報がないということはないですし。強いて言えば、地域性でしょうか。僕は地方都市で育ちましたから、自分が育ったような町を歩くと、こういう所での高校時代は面白くないだろうなあなんてよく思いますよね。僕は早くここから出たいと思いました。若さは広がりを求めますから、小さなコミュニティーは一番窮屈で、その地域が自足していればいるほど腹立たしい。そこから出たいと思うのも当然ですよね。

ただし、ある年代からまた回帰していく、この流れを助長するような形でいろいろ考えてほしいし、同時に受け入れる。若い人が出ていくのはしょうがないけど、かなり古びてもまだまだ使える人が戻ってくる。そういう地方社会の可能性を作っていけば、日本もまだまだ捨てたもんじゃないと思いますけどね。

山口　そうですね。その土地の良さって、一回外を見ないと分からないんですよね。

外川　地方で頑張ってらっしゃる方は、一度都会に出ていろいろともまれて、地元に帰って、こんなにいいものがあると気づいて頑張っていらっしゃいますね。池内さんがいらっしゃった新潟県村上市などもそうですし。

池内　そういう方は多いんじゃないですかね。肩ひじ張って帰ろうとしなくてもUターンすることがごく普通になってくればと思いますね。僕はこれからもふるさと喪失者で生きるつもりですが、帰ってる人は同期の者でも何人かいますよ。

山口　私も、また箱根に住みたいとは思わないですね（笑）。

池内　そうですね。それなりに表現している人間は、絶えず自足しない不安定な状況の方が面白いんです。でも、ふるさとというのは安心感はありますよ。近くに行って自分の言葉に近くなってくると、非常に安心感がある。若い時はこんなものと思ってたけど、懐かしいなというのと、老いればこういう所で過ごしてもいいかなという気持ちはあります。

（以下、次号に続きます）

観光文化バックナンバー一覧

発行年月	号数	主な内容
1976.12	1	創刊のことば…西尾 壽男 論説 旅行業者の本質とマーケティング課題…林 周二 随想 ホテル そのプラスとマイナス…扇谷 正造
1977.3	2	貝塚とクリーン作戦…伊藤 善市 市民が参加する観光地づくり…杉岡 碩夫 観光文化財 どう見るどう見せる…岩橋 二郎
1977.5	3	ある旅の思い出…岡本 哲治 観光業とライフスタイル…村田 昭治 日本旅館の変容と回生の條件…草柳 大蔵
1977.7	4	旅と風物…高山 英華 「創る観光」の必要性 観光産業の発展のために…堺屋 太一 旅行者の水準をどうとらえるか?…岡田 喜秋
1977.9	5	ある自動車旅行…河野 豊弘 イタリアの山中の古寺に壁画を訪ねて…吉川 逸治 「面の外交」としての海外旅行…猿谷 要
1977.11	6	観光開発の一視点…林 知己夫 観光国土づくり―新しい日本の観光のために―…田村 明 自然保護と開発をめぐって…徳久 球雄
1978.1	7	命なりけり…井上 靖 座談会 1980年代の観光を語る…角本 良平ほか
1978.3	8	旅について考える…高橋 壽夫 観光の二つの顔…曾野 綾子
1978.5	9	旅人讃歌…中山 伊知郎 旅行の小グループ化とその対応…田中 輝好
1978.7	10	個別型の観光…八十島 義之助 高速道路の開通が沿線観光地に及ぼす影響とその対応策について…花岡 利幸
1978.9	11	温泉地旅館への注文…林 修三 観光サービスと私…岩切 章太郎
1978.11	12	私と旅と資料…千家 てつ磨 観光情報を求めて…江橋 慎四郎
1979.1	13	特集 80年代の海外旅行 巻頭言 観光と歓楽…梶本 保邦
1979.3	14	特集 80年代の陸上輸送 巻頭言 史跡めぐり…平田 敬一郎

発行年月	号数	主な内容
1979.5	15	特集 1980年代のホテル産業 巻頭言 「サービス」…阿部 恂
1979.7	16	特集 旅行志向の変化とリゾート 巻頭言 レクリエーションと省エネルギー…葛西 嘉資
1979.9	17	特集 観光と開発 巻頭言 三つのホテル…齋藤 正
1979.11	18	特集 旅行者の求める「観光」 巻頭言 「礼儀作法」…ジェフリー・ハミルトン
1980.1	19	特集 パッケージ・ツアー 巻頭言 新春を迎えて…手塚 良成
1980.3	20	特集 日本のバケーション 巻頭言 海外旅行と国際理解の促進…近藤 晋一
1980.5	21	特集 サラリーマンの休暇 巻頭言 紺屋の白袴…高橋 壽夫
1980.7	22	特集 文化・教養型の旅行 巻頭言 都市と観光地…津上 毅一
1980.9	23	特集 旅行と情報化社会 巻頭言 旅とコンピューター…山田 幸作
1980.11	24	特集 「団体旅行」を見直す 巻頭言 いろいろなお花畠―しあわせな想い出から―…川喜田 二郎
1981.1	25	特集 「熟年社会」の観光 巻頭言 〝旅のお手伝い〟心得帳…馬渡 一眞
1981.3	26	特集 女性からみた観光 巻頭言 春…堀 文子
1981.5	27	特集 これからの修学旅行 巻頭言 時代おくれの感想…桑原 武夫
1981.7	28	特集 旅を楽しくする工夫 巻頭言 ポートピア81会場はファッションタウンに…宮崎 辰雄
1981.9	29	特集 ミドルエイジと余暇 巻頭言 ジャワの螢…林 雄二郎
1981.11	30	特集 現代の観光の意義を考える 巻頭言 国際観光に思うこと…朝田 静夫
1982.1	31	特集 これからの社会と旅 巻頭言 「旅」の原点を問い直す…西村 康雄

発行年月	号数	主な内容
1982.3	32	特集 旅行業の役割を探る ―日本交通公社創業70周年記念 巻頭言 70年の里程標…津田 弘孝
1982.5	33	特集 国際交流と観光 巻頭言 国際交流と観光…法眼 晋作
1982.7	34	特集 望ましい国内観光の実現に向けて 巻頭言 旅・外国語・方言…和田 祐一
1982.9	35	特集 旅行需要の創造と誘発 巻頭言 文化都市への挑戦…宮崎 辰雄
1982.11	36	特集 快適・安全な旅の実現に向けて 巻頭言 責任システムに一考を…草柳 大蔵
1983.1	37	特集 情報化社会と観光 巻頭言 熟年旅行のすすめ…石田 博
1983.3	38	特集 学習社会と観光 巻頭言 自らを豊かにする旅…秦 正流
1983.5	39	特集 旅のマナー 巻頭言 マナー遵守の働きかけを…佐々 保雄
1983.7	40	特集 家庭生活と観光 巻頭言 新しい生活の創造―家族旅行…会田 雄次
1983.9	41	特集 高齢化社会と観光 巻頭言 10年後の旅の夢…上前 淳一郎
1983.11	42	特集 観光の活性化をめざして 巻頭言 観光、照る日曇る日…津田 弘孝
1984.1	43	特集 旅の歴史と将来 巻頭言 新しい観光への期待…西村 英一
1984.3	44	特集 国際交流と海外旅行―海外渡航20周年 巻頭言 国際交流20年の道程 ―形の自由化から心の解放へ―…石田 博
1984.5	45	特集 旅に学ぶ―芸術・文化と観光 巻頭言 新しい社寺の旅を求めて…濱田 隆
1984.7	46	特集 旅行に対する価値観と志向 巻頭言 都市ぐるみの観光サービス…伊藤 善市
1984.9	47	特集 新しい旅の形を求めて 巻頭言 「知」と「美」の演出―イギリスのナショナル・トラスト―…津上 毅一
1984.11	48	特集 熟年者の旅 巻頭言 望まれるパーソナルサービス…金沢 正雄

発行年月	号数	主な内容
1985.1	49	特集 地域振興と観光 巻頭言 観光の今昔…山田 明吉
1985.3	50	特集 旅上手な外国人旅行客 巻頭言 外客の行動範囲の拡大…山岡 通太郎
1985.5	51	特集 旅館はどこへ—中小旅館の生きる道 巻頭言 新しい時代に向かって—新潟県の観光の取組み—…君 健男
1985.7	52	特集 旅館はどこへ—何を特色として打ち出すか？ 巻頭言 観光と平和…木村 睦男
1985.9	53	特集 観光地の変遷 巻頭言 四つの博物館—韓国の旅に思う—…平田 敬一郎
1985.11	54	特集 観光地のあり方 巻頭言 「観光」を拓いた岩切さん…津田 弘孝
1986.1	55	特集 観光地—ブーム倒れにならないために 巻頭言 貿易摩擦と海外旅行の促進…辻 宏邦
1986.3	56	特集 クルマ時代の観光地 巻頭言 〝一見〟への反省…岡田 喜秋
1986.5	57	特集 クルマ時代の旅のかたち—ドライブ旅行者の意見 巻頭言 キャラバンの時代…林 雄二郎
1986.7	58	特集 日本を世界に開く—地域の国際化 巻頭言 「国際観光地モデル地区」指定を終えて…望月 鎭雄
1986.9	59	特集 日本人の休み方・遊び方 巻頭言 日本人の休み方・遊び方…林 知己夫
1986.11	60	特集 転換ローカル線がんばる—地域観光の核として 巻頭言 頑張れ第三セクター…白井 昭
1987.1	61	特集 観光と文化財保存 巻頭言 自然と文化…梶本 保邦
1987.3	62	特集 観光事業とサービス 巻頭言 脱いで入るか、入って脱ぐか—観光事業のサービス再検討のとき—…中村 實
1987.5	63	特集 地域おこしの核—地方都市 巻頭言 ソフト化時代の地域おこし…田村 明
1987.7	64	特集 瀬戸大橋—観光はどう変わるか 巻頭言 瀬戸大橋と観光…柚木 治憲
1987.9	65	特集 活路をさぐる温泉観光地 巻頭言 今後の観光政策について…吉田 耕三

発行年月	号数	主な内容
1987.11	66	特集 1000万人—海外旅行倍増計画 巻頭言 国際観光開発のための体制整備をめざして…須藤 幹雄
1988.1	67	特集 海外旅行—いろいろな楽しみ方 巻頭言 海外旅行倍増計画PartⅡ スペインを旅行して…皆川 愼吾
1988.3	68	特集 あらためて海外に目を開く 巻頭言 海外旅行倍増計画PartⅢ 国際コンベンションの振興のために…桜田 薫
1988.5	69	特集 「教育旅行」—修学旅行の新しい発展 巻頭言 常に修学旅行の本質に立ち戻った論議を—一層の充実と発展のために—…高橋 哲夫
1988.7	70	特集 コンベンション—にぎわいの場をつくる 巻頭言 愛媛県県民文化会館について…白石 春樹
1988.9	71	特集 ツーリズムアクションプログラム—90年代観光振興行動計画 巻頭言 90年代観光振興行動計画について…佐藤 正紀
1988.11	72	特集 見直されるバスツアーの魅力 巻頭言 今、バス旅行が面白い…阿部 繁
1989.1	73	特集 独自性のある地域振興 巻頭言 旅と静寂…利光 一夫
1989.3	74	特集 テーマのある旅 巻頭言 千川上水…柳井 乃武夫
1989.5	75	特集 NIES観光客の台頭 巻頭言 メッセージ…プラパンサ・バタヤノン
1989.7	76	特集 食べる文化を旅に訪ねる 巻頭言 幕末の遺外使節と欧米料理…村岡 實
1989.9	77	特集 民家ウォッチング 巻頭言 世界の古民家…杉本 尚次
1989.11	78	特集 織り、着る文化を訪ねる 巻頭言 織物と文化…北村 哲郎
1990.1	79	特集 観光開発と地域振興を考える 巻頭言 観光開発と地域振興…山田 幸生
1990.3	80	特集 四季型余暇・休暇のすすめ 巻頭言 秋休みをとりませんか…小竹 直隆
1990.5	81	特集 休暇の集中を避けるために—欧米ではどうしているか 巻頭言 夏休みの休暇のとり方—ヨーロッパ…唐津 康夫
1990.7	82	特集 世界に通じる温泉観光地 巻頭言 新しい温泉観光地の創造をめざして…矢田 松太郎

発行年月	号数	主な内容
1990.9	83	特集 旅日記の文化史 巻頭言 慶長大名の出張旅行…二木 謙一
1990.11	84	特集 海外職場旅行 巻頭言 最近の職場旅行事情…寺田 学
1991.1	85	特集 国際交流による地域振興 巻頭言 国際交流による地域振興…室谷 正裕
1991.3	86	特集 環境観光 巻頭言 不思議な風景が見えるところから地球にやさしい旅、がはじまる…羽仁 進
1991.5	87	特集 旅館料理 巻頭言 泊まる楽しみ、味わう喜び…梶本 保邦
1991.7	88	特集 安全旅行 巻頭言 旅行社の安全確保…後藤 靖子
1991.9	89	特集 21世紀に向けた観光振興方策 巻頭言 観光交流拡大計画…寺西 達弥
1991.11	90	特集 旅行ガイドブックの研究 巻頭言 岐路に立つガイドブック編集—ハウツーからホワッツ・ビハインドへ—…森田 芳夫
1992.1	91	特集 新時代の旅行マーケット 巻頭言 旅行の現状と展望…利光 一夫
1992.3	92	特集 卒業旅行 巻頭言 旅に学ぶ…筒井 寛秀
1992.5	93	特集 旅と味覚 巻頭言 美酒名酒に出会うよろこび…穂積 忠彦
1992.7	94	特集 家族旅行 巻頭言 体験的家族旅行…柳井 乃武夫
1992.9	95	特集 伝統行事を観光に活かす 巻頭言 地域伝統芸能を見直す…梅田 春実
1992.11	96	特集 土に憩う—都市と農村の交流 巻頭言 私のお米カレンダー…富山 和子
1993.1	97	特集 旅館・ホテルのサービスを考える 巻頭言 旅館の女将…岡本 伸之
1993.3	98	特集 新しい鉄道旅行地図 巻頭言 鉄道旅行の復権…角本 良平
1993.5	99	特集 旅館料理の新たな展開を考える 巻頭言 初めの一品、終わりの一品…小林 しのぶ

発行年月	号数	主な内容
1993.7	100	特集 観光の世紀（財団改組30周年記念号） 巻頭言 かわいい親には旅をさせろ…荒井 正吾 座談会 旅は世につれ―日本人の旅30年を考える…梅澤 忠雄・残間里江子・原重一
1993.9	101	特集 観光文化振興基金による助成研究報告書 巻頭言 観光資源の保全を考える…梶本 保邦
1993.11	102	特集 旅館・ホテルと地域社会 巻頭言 もてなしの花…古作 厚子
1994.1	103	特集 旅行の現状と展望 巻頭言 不況と旅行…原 重一
1994.3	104	特集 海外旅行この30年 巻頭言 海外旅行自由化30年を迎えて…兼松 学
1994.5	105	特集 旅館料理の基本を振り返る 巻頭言 海外旅行史を語る資料の収集を…勝野 良平
1994.7	106	特集 変化する旅行者の嗜好と宿 巻頭言 中高年が変える旅館ホテル…横溝 博
1994.9	107	特集 国際会議誘致法の成立と地域振興を考える 巻頭言 国際コンベンションの倍増を目指して…荒井 正吾
1994.11	108	特集 温泉、自然資源と変貌する観光 巻頭言 温泉・恵まれた資源の保全と活用を…奥村 明雄
1995.1	109	特集 旅行の現状と展望 巻頭言 価格破壊・空洞化のいま、観光業界は望ましい姿の模索を…溝尾 良隆
1995.3	110	特集 変わりゆく観光地の魅力づけ 巻頭言 「ひとり旅」礼賛…秋田 守
1995.5	111	特集 インバウンドを考える 巻頭言 「大震災・円高・観光立国」…石森 秀三
1995.7	112	特集 ツーリズム・フォー・オール〈旅のノーマライゼーションのすすめ〉 巻頭言 「真」の観光立国を目指して…竹内 幸雄
1995.9	113	特集 観光政策の基本的方向―観光政策審議会答申から 巻頭言 ものづくり立国からゆとり観光立国への転換…荒井 正吾
1995.11	114	特集 旅行業法・約款の改正と今後の旅づくり 巻頭言 旅行業法・約款の改正に寄せて…楠木 行雄
1996.1	115	特集 戦後から平成へ―旅行雑誌『旅』が語る五十年 巻頭言 旅の世相史…加藤 秀俊
1996.3	116	特集 成功する観光地の活性化とプロモーション―欧米の事例より 巻頭言 外国人観光客にも魅力的な〝地域おこし〟…井山 嗣夫

発行年月	号数	主な内容
1996.5	117	特集 変わるサービス、変わらないサービス… 巻頭言 今、ツーリズム産業に求められるもの スイス・ホスピタリティ道…イェーヌC.A.ジュテヘリン
1996.7	118	特集 あなたの日本はどこですか… 巻頭言 旅フェア96で学んだもの、見つけたもの 旅フェアを通じた国内観光の魅力アピール…長尾 正和
1996.9	119	特集 いい国つくろう…21世紀への「観光開国」宣言！ 巻頭言 「ウェルカムプラン21」より 日本ファンの外国人が増えれば日本を見る目も変わる…竹内 宏 特別対談（上） いい国つくろう…21世紀への「観光開国」宣言…大前研一・松橋 功
1996.11	120	特集 自分の地域を愛せますか、誇れますか… 巻頭言 「ウェルカムプラン21」より 国際的理解という側面から期待される観光交流…和田 敬司 特別対談（下） いい国つくろう…21世紀への「観光開国」宣言！…大前研一・松橋 功
1997.1	121	特集 Iターン・Jターンでまちづくり… 巻頭言 地域に魅せられ、その振興に旗ふる人々 教育・文化・地域づくりと観光…下平尾 勲
1997.3	122	特集 道がつなぐ、道がとりもつ―人・地域… 巻頭言 観光街道の魅力とその目指すところ 新しい国土計画と観光の意義…中村 英夫
1997.5	123	特集 留学生がつくる、新しい世紀への架け橋… 巻頭言 あなたは日本のどこが好きになりましたか 留学生は一人一人が、民間大使、日本語で多文化交流を…大森 和夫
1997.7	124	特集 東京再考―私たちは暮らしぶりが伝わる街が好き…都心に蘇る歴史的建造物の魅力と価値 巻頭言 歴史的建造物の魅力をまちづくりに生かす…奥 典之
1997.9	125	特集 成功するコンベンションシティ―顔が見える都市、こころが見える交流 巻頭言 コンベンションシティ・シンガポール地域共生型の発展…ケビン・レオン
1997.11	126	特集 星空と地球にやさしい街づくり―ライトダウンがもたらすもの… 巻頭言 村八分…梶本 保邦
1998.1	127	特集 「三平世紀」（30年）前の未来予想を今、ふりかえる
1998.3	128	特集 音風景を観る・聞く・学ぶ 巻頭言 休止符から何が聞こえますか…宮沢 明子
1998.5	129	特集 暦が語る地域の暮らし 巻頭言 個人暦を創ってみませんか…小松 和彦
1998.7	130	特集 お天気と旅―雨・風の魅力と不思議 巻頭言 八景は観光キャッチコピーの名作…渡辺 貴介
1998.9	131	特集 民営鉄道快走！その新しい試みと知恵比べ 巻頭言 トロッコ列車に声援を送る…檀上 完爾
1998.11	132	特集 日本型エコ・ツーリズムを探る―その美しい成熟に向けて旗ふる人々 巻頭言 エコ・ツーリズム精神今こそ…舩山 龍二

発行年月	号数	主な内容
1999.1	133	特集 やっぱり日本に行きたいね 巻頭言 ―インバウンド・ルネッサンスのすゝめ 観光業も〝輸出〟に励もう―インバウンドにかかる未来の成長！…吉野 源太郎
1999.3	134	特集 偉大なる地域の宝物、産業遺産を探る 巻頭言 「地域の〝知の遺産〟を活かそう！…望月 照彦
1999.5	135	特集 オートキャンプ…もう一つのライフスタイル 巻頭言 人と人、人と自然の〝なじみ〟に開眼…鈴木 忠義
1999.7	136	特集 評価・格付けから学ぶこと、活かすもの 巻頭言 今、日本に求められるシンプルで確実な評価指標…ジャン・シルヴェストル
1999.9	137	特集 観光地の「トイレズム」―その環境保全と整備 巻頭言 トイレ、その先は何処…瀬田 信哉
1999.11	138	特集 旅の原点は信仰にあり 巻頭言 「信心のため」を突破口にして開かれた現代の旅の原点…紅山 雪夫
2000.1	139	特集 西暦2000年の今、「未知の国ニッポン」は何故知らないからこそ「遥か彼方の国」 巻頭言 …R.D.ウイリアムズ
2000.3	140	特集 地名によって忘却される・甦る歴史 巻頭言 西日暮里…柳井 乃武夫
2000.5	141	特集 峠は今、… 巻頭言 タワの宿とオーシュウベェ…宇江 敏勝
2000.7	142	特集 「クルーズの時代」とは、… 巻頭言 クルーズの商品性…鈴木 志津子
2000.9	143	特集 資源保護からの温泉再検証 巻頭言 湯の神の行方…池内 紀
2000.11	144	特集 20世紀の旅人 巻頭言 エコツーリズムが芽生えた20世紀…小林 天心
2001.1	145	特集 2010年の旅人像 巻頭言 2010年元旦の日記から…唐津 康夫
2001.3	146	特集 海外ガイドブック考現学 巻頭言 まなざしの規範…加太 宏邦
2001.5	147	特集 東海道400年。街道ウォーキングのスゝメ 巻頭言 「来し方」に思いを巡らす街道歩き…渡邉 貴介
2001.7	148	特集 観てから行くか、行ってから観るか… 巻頭言 根づかせたい。フィルム・コミッション
2001.9	149	特集 今世紀も「お客様は神様」ですか？ 巻頭言 ゼロのサービス…出島 二郎

発行年月	号数	主な内容
2001.11	150	特集 創刊25年記念特集記録 ユダヤ難民に自由への道をひらいた人々上 巻頭言 沖縄観光への期待…伊藤 善市
2002.1	151	特集 創刊25年記念特集記録 ユダヤ難民に自由への道をひらいた人々下 付録 バックナンバー一覧 No.76～No.149
2002.3	152	特集 拡げたい自然ガイドプログラム…作りたい新しい「つながり」 巻頭言 劇場…廻 由美子
2002.5	153	特集 「芭蕉!しますか、それとも「弥次喜多」ですか…旅行文化人の勘違い!?を探る 巻頭言 旅は、ただ旅であるだけで旅…酒井 順子
2002.7	154	特集 甘くない!?観光地の金太郎アメ・シンドローム…観光地再生―個性化の勘違いを考える 巻頭言 真似て超えるということ…江戸家 小猫
2002.9	155	特集 「9・11」が意味するもの 巻頭言 アメリカ同時多発テロに想う…滝口 俊子
2002.11	156	特集 元気の源は田舎にあり!!―都市と農山村の交流・共生を求めて― 巻頭言 古老の民話に魅せられて…持谷 靖子
2003.1	157	特集 友好の絆よ永遠に!!国交正常化30周年―新時代を迎えた日中交流 巻頭言 躍進中国の光と陰…近藤 龍夫
2003.3	158	特集 江戸開府400年―江戸から東京へ 巻頭言 江戸を伝える町…浦井 正明
2003.5	159	特集 京都水物語―水とともに暮らす古都 巻頭言 水の世紀のために知恵を…五所 光一郎
2003.7	160	特集 スローツーリズムを考える―旅は人生。今、スローな旅とは… 巻頭言 そろそろ日本も、ゆっくり休もう…島村 菜津
2003.9	161	特集 新・観光立国―観せるべき日本の光とは 巻頭言 観光からツーリズムへ…住野 昭
2003.11	162	特集 世界遺産―光と陰 巻頭言 世界遺産と観光…吉田 正人
2004.1	163	特集 地域ブランドとは何か 巻頭言 ブランドの向こう側へ…出島 二郎
2004.3	164	特集 里山―その価値と活用 巻頭言 里山と長期投資…澤上 篤人
2004.5	165	特集 スポーツと地域社会―今、スポーツが地域を熱くする 巻頭言 『スポーツ雪合戦』と地域づくり…山中 漠
2004.7	166	特集 景観形成を問う 巻頭言 取り戻そう 銀座に柳とせせらぎを…勝又 康雄

発行年月	号数	主な内容
2004.9	167	特集 バリアフリーからユニバーサルデザインへ 巻頭言 それは感動の共有から始まった…叶内 路子
2004.11	168	特集 ウエルネスでツーリズム活性化 巻頭言 「湯治」の見直し…植田 理彦
2005.1	169	特集 深まる日韓交流―その背景・意義と将来展望 巻頭言 恋のあとに残るもの…黛 まどか
2005.3	170	特集 歌舞伎の魅力―400年の歴史を生きる伝統文化の世界 巻頭言 脈々とつながる伝統芸能の「血」…坪内 ミキ子
2005.5	171	特集 都市と路地―人はなぜ路地に惹かれるか 巻頭言 ジェーン・ジェイコブスの都市と路地…宇沢 弘文
2005.7	172	特集 ジャパニーズクール―日本のポップカルチャーの可能性や如何に 巻頭言 ジャパニーズクールと日本的感性…辰巳 渚
2005.9	173	特集 道路と観光―今、道路に期待されること 巻頭言 道路と観光…鈴木 忠義
2005.11	174	特集 「学び」のすすめ―学びこそ人間性回復と地域活力の原点 巻頭言 「遊学」如」の旅…内田 州昭
2006.1	175	特集 「食」の復権―地産地消で生かす風土の味わい 巻頭言 風土食を磨く「本物の味」…向笠 千恵子
2006.3	176	特集 アイルランドの誘惑―精神風土とその文化的磁力 巻頭言 ケルト巡り…河合 隼雄
2006.5	177	特集 歩く―五感で楽しむ観光と出会い 巻頭言 足が文化をつくる…海野 弘
2006.7	178	特集 観光人材育成―観光の未来のために 巻頭言 観光力は、人間力…望月 照彦
2006.9	179	特集 滞在を楽しむ―自己充足の新たなライフスタイル 巻頭言 滞在型旅行の原点…廻 洋子
2006.11	180	特集 観光とホスピタリティ 巻頭言 ホスピタリティと自己実現…淀川 隆顕
2007.1	181	特集 地元力―地域を支えるその実力と可能性 巻頭言 地元力…茶谷 幸治
2007.3	182	特集 次世代継承 巻頭言 不退の心―お水取りの危機救う…水野 正好
2007.5	183	特集 昭和は遠くなりにけり 巻頭言 〈昭和〉ふたたび…海野 弘

発行年月	号数	主な内容
2007.7	184	特集 仏教ルネッサンス―お寺と社会の縁起復興 巻頭言 寺の鐘の音…山折 哲雄
2007.9	185	特集 宮沢賢治とイーハトーブ 巻頭言 イーハトーブの風景…増田 寛也
2007.11	186	特集 源氏物語千年紀を祝う 巻頭言 源氏物語千年紀を迎えるにあたり…芳賀 徹
2008.1	187	特集 上質な日本 巻頭言 温故創新…表 博耀
2008.3	188	特集 足尾銅山―その歴史に学び保存活用を期する 巻頭言 足尾の紅葉…立松 和平
2008.5	189	特集 瀬戸内海の風土と文化復興 巻頭言 多島海の理想―瀬戸内海と地球…川勝 平太
2008.7	190	特集 里山と観光立県千葉 巻頭言 21世紀型観光の舞台、里山…堂本 暁子
2008.9	191	特集 ツーリズム新時代 巻頭言 観光新時代…舩山 龍二
2008.11	192	特集 愛しの富士山 巻頭言 富士山ときめき 無限大…ロッキー 田中
2009.1	193	特集 横浜開港150周年 巻頭言 横浜都市づくり150年の軌跡…田村 明
2009.3	194	特集 日本のこころ 桜文化 巻頭言 さくらの思い出…中島 千波
2009.5	195	特集 張れ!静岡のお茶力 巻頭言 第13回全国茶サミット静岡大会in牧之原…西原 茂樹
2009.7	196	特集 ジオパークジャパン 巻頭言 日本列島全体がジオパークだ…尾池 和夫
2009.9	197	特集 山岳宗教都市・高野山―その美と歴史文化 巻頭言 高野山その美と文化…永坂 嘉光
2009.11	198	特集 平城遷都1300年―日本の歴史と未来を考える 巻頭言 平城遷都1300年祭に寄せて…平山 郁夫
2010.1	199	特集 広がれ日本のフットパス 巻頭言 日本フットパス・システムの夢おこし…村山 友宏
2010.3	200	特集 旅讃歌―心のかて 旅で授かる生きる力 巻頭言 旅の余白…林 望 二百号特別企画座談会 旅は世につれ…池内 紀・山口 由美・外川 宇八

※観光文化バックナンバーは、原本のすべてが旅の図書館にそろっており、閲覧が可能です。

財団法人　日本交通公社　出版物のご案内

■旅行年報２００９

直近一年間の旅行・観光市場にまつわるあらゆる出来事について、数多くのデータ・資料をもとに分析。日本人の国内・海外旅行、外国人の訪日旅行、観光産業、国内観光地、観光政策など、さまざまな角度から旅行・観光市場の現状を一望できる一冊。〇九年九月発行。

■旅行者動向２００９

国内・海外旅行者の意識と行動について毎年実施している当財団独自調査の分析結果をビジュアルに解説。〇九年八月発行。

■Market Insight 2009
（日本人海外旅行市場の動向）

日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。当財団独自調査。日本語版、英語版あり。〇九年七月発行。

■観光実践講座講義録

地域主体の観光～新しい時代の価値観を地域から発信する～

毎年十一月に実施している二日間の講座講義録。平成二十年度の講師は、浜名湖えんため代表・稲葉大輔氏、前安塚町長／観光カリスマ・矢野学氏、元紀南振興プロデューサー／有限会社伊勢福社長・橋川史宏氏、田野畑村役場・渡辺謙克氏、東北観光推進機構教育旅行アドバイザー／観光カリスマ・小椋唯一氏。〇九年三月発行。

※当財団出版物のご注文はホームページからお願いします。

担当：財団法人日本交通公社 観光文化事業部

電話 03・5208・4704 http://www.jtb.or.jp

次号予告

●三内丸山遺跡は日本最大級の縄文集落跡。次号は『縄文文化と現代――三内丸山に学ぶ』と題し、長期にわたり持続した縄文社会の自然環境、文化的背景とツーリズムの可能性を探ります。

調査研究だより

●東京・原宿の明治神宮の一角にある清正井（きよまさのいど）に若い女性が連日行列を作っている現象がメディアでよく取り上げられています。いわゆるパワースポットということで、訪れた人は運気が上がるとのこと。その真偽はともかく、ブームの力というのはとても大きいものです。

●場所は変わって、沖縄にも琉球の時代から聖地とされてきたスポットが多数存在しています。ここでは名称は挙げませんが、いくつかの場所では近年のブームによって観光客が押し寄せ、かつてと雰囲気が変わってしまったと戸惑う地元の声もあります。

●そこで沖縄県では、昨年度より、県内観光地の適正な範囲内での利用を目指す「持続可能な観光地づくり支援事業」を実施しています。当財団ではこの事業に対して、「観光資源の適切な管理と活用」といった観点から調査支援を行ってきました。観光地の「保全と活用のバランス」を県全体で探る調査は、全国に先駆けた野心的な取り組みとなります。今回の成果が沖縄モデルとして全国に波及していくよう、当財団では今後も全力で取り組んでまいります。

●ところで私はというと、それほど運気が上がった様子もないようです。やはり業務で訪れているだけでは効果はあまり期待できないということでしょうか　（中島）

編集後記

◆日頃は『観光文化』をご愛読賜りありがとうございます。お陰さまにてこの度、節目の二百号の発行を迎えることができました。心より御礼申し上げます。創刊号が世に出たのが一九七六年（昭和五十一年）十二月、三十三年有余の歳月が流れました。ご参考までにバックナンバー一覧を掲載させていただきました。

◆「観光」振興が国の重要政策となり地域活性化の牽引役を期待されるなかで、『観光文化』もその一助となるべく地域にまなざしを注ぎ、特集を組んで観光の新しき潮流・発想・視点やトピックスなどを発信してまいりました。今号では趣を変えて旅そのものに焦点を置きました。「旅の復権」を図るべく「旅の達人」にご登場いただき、ご自身が追求されるテーマに沿って旅の魅力・恵み・効用をご執筆いただきました。先行きに希望が持てず閉塞感の漂う今日、旅でのさまざまな体験が生きる力となってくれます。旅こそまさに心の栄養剤、と思う次第です。

◆かねて希望していましたが、連載をご寄稿いただいています池内紀、山口由美の両氏をお招きし座談会を開催しました。タイトルは「旅は世につれ」。期せずして小誌百号に掲載された座談会タイトルと同一になりました。時代とともに変わりゆく旅のありようと変わらぬ旅の奥義を縦横に語っていただきました。次号を含め二回に分けてお届けします。その間、お二人の連載は休止させていただきます。　（宇八）

観光文化　第 200号

第 34 巻 2 号通巻第 200 号

発行日 2010 年 3 月 20 日

●

発行所：財団法人　日本交通公社
東京都千代田区丸の内 1-8-2
第 1 鉄鋼ビル
〒 100-0005　☎ 03-5208-4701
http://www.jtb.or.jp

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2
第 2 鉄鋼ビル　旅の図書館内
〒 100-0005　☎ 03-3214-6051
http://www.jtb.or.jp/library/

編集人：外川宇八

発行人：新倉武一

●

印刷所：ＪＴＢ印刷株式会社

禁無断転載

ＩＳＳＮ　０３８５－５５５４